

御裁下相成候條右ニ照準支給方可取計此旨相總
候事

第一條 官林調査及ヒ伐木測量等ニテ各地出
張ハ一般ノ旅費日當ヲ廢シ一切ノ費用トシ
テ別紙第一號表面ノ通り手當ヲ支給スヘシ
第二條 事業ヲ三分ニシテ一等二等三等トシ
其區分ヲ立ル如キハ一等ハ官林調査苗木植
付檢査二等ハ三角測量三等ハ官林伐木取額
木石綱場詰小區ノ測量(横濱神戸港等一小區
ノ測量ヲ云フ)

第三條 官林調査苗木植付檢査トシテ出張中
ハ別紙第二號表面ノ通り假林區ヲ立其林區

内ヲ管内トシ測量事業ハ一事業ヲ限リ(假令
ハ關東三角内又ハ横濱神戸港)管内ト定ム
第四條 月手當計算法ハ御用ノ地へ到着ノ翌
日ト發足ノ前日トヲ以テ十五日前後ノ區分
ニ據リ全月或ハ半月分ヲ支給スベシ一月中
甲乙丙ノ地へ轉換スルモ重複ニハ給セザル
ベシ

第五條 官林調査其外ニテ出張ノ者往返ノ費
ハ一般ノ定則ニヨリ支給スベシ
但シ官林調査苗木植付檢査測量等ハ該御
用ノ地迄ヲ往路トシ御用濟出立ノ地ヨリ
歸路トス

第六條 甲ノ林ヨリ乙ノ林迄へ轉勤ヲ命スル
トキハ甲地出發ヨリ乙御用ノ地迄ハ一般ノ
定則ニヨリ支給スヘシ

第七條 伐木事業上ニ於テ山林ヲ縱橫奔走ス
ルハ別ニ費ヲ給セスト雖モ非常出氷等ニテ
流失材繫留等ノ事ニ付片道三里以外ノ地ニ
出張スルモノハ同手當ノ外一般定則ニヨリ
管内旅費日當ヲ支給スヘシ

但三里未滿ト雖モ一泊スルモノハ管内滯
在日當ヲ給ス

第八條 前條ノ場合ニ於テハ局長ノ許可ヲ得
ザレハ出張スルモ旅費ハ給セザルヘシ尤遠

隔ノ地ニテ事急卒ニ出ル分ニ限リ出張巡廻
ノ後其出張所長ヨリ事由ヲ詳記シ届出ルヲ
待テ給スルコト有ルベシ

第九條 本局所在ノ地ヨリ三里以外ノ地ニテ
三角測量及ヒ官林調査等ノ事業ヲ取扱フモ
ノハ手當ヲ給シ三里未滿ハ一切給セザルベ
シ

第十條 三角測量ニ就キ基點撰定等ノ爲メ遠
隔ノ地ニ往復スルモノ及ヒ論地檢田等ノ場
所檢分トシテ臨時出張ノ者ハ勿論其他前个
條ニ掲載無之廉ハ一般ノ定則ニ據リ支給ス
ヘシ

地理局官員出張手當表

官員等級	一 判 任	二 等 外	三 等 外	五 等 外
同手當	出役 金一圓	金六十錢	金四十錢	
	滯在 金三十五錢	金四十錢	金三十錢	
月手當				七圓五十錢

御用係 雇月給金三百五十圓未滿迄ハ判任官ニ準シ三十圓未滿ハ等外ニ準シ支給スヘシ

同日給ハ三十日分ヲ積算シ月俸日限ト見做シ前條ニ準據ス

- 第一大林区 東京 神奈川 埼玉 枥木 茨城 千葉
- 第二大林区 群馬 長野 石川 新潟 山梨 岐阜 愛知 静岡
- 第三大区 三重 和歌山 堺 大坂 京都 滋賀
- 第四大区 岡山 廣島 山口 島根 高知 愛媛
- 第五大区 長崎 福岡 大分 熊本 鹿兒島

旅費定則

第六大林区 福島 宮城 山形 秋田 岩手 青森

地理局官員各地出張ノ節日當及ヒ月手當 用途ノ計算

- 一等事業判任官出張日當ハ管内滞在日當五十錢ノ二倍同等外ハ判任官ノ十分ノ七判任官滞留日當ハ一般定則ノ通リ同等外ハ判任官ノ十分ノ一トス
- 二等事業判任官出役日當ハ一等事業出役同手當十分ノ六同等外ハ判任官ノ三分ノ二判任官滞留日當ハ一等事業滞留日當五分ノ四同等外ハ判任官ノ三分ノ二即チ二十六錢六厘餘ノ端

數ヲ收メテ三十錢トス

- 三等事業判任官手當ハ管内滞在日當ハ三十八ヲ折半シタルモノ同等外ハ判任官ノ三分ノ二トス

土木局官員出張月手當規則

第一條 凡各川在勤ノ者(淀ノ大坂信濃ノ新潟利根ノ東京ノ如キヲ云フ)該地ヨリ其域内ノ工場へ出張中ハ旅費日當ヲ廢シ一切ノ費用トシテ別紙表面ノ通月手當ヲ支給スヘシ

但此場合ニテハ何年何月何日ヨリ何縣下何郡何村工場へ出張(淀川ハ大坂信濃川ハ新潟利根川ハ東京ヲ出發スルヲ云フ)候旨

届出ツヘシ

第二條 凡月手當ヲ三分シテ一等手當二等手當三等手當トス其一等手當ハ測量或ハ通辨等ヲ兼務シ屢出張巡回スルモノニ給ス二等手當ハ判任三等手當ハ等外及ヒ屢ノモノ工場従事スル者ニ限ルヘシ

第三條 月手當計算方ハ在勤地(淀ノ大坂信濃ノ新潟利根ノ東京ノ如キヲ云フ)ヨリ工場へ出發ノ日ト工場ヨリ在勤地へ歸着ノ日ヲ以テ十五日前後ノ區分ニ據リ全月或ハ半分ヲ支給スヘシ
但一月中甲乙丙ノ地へ轉換スルモ重複ニ

ハ給セザルヘシ

第四條 工場出張中通常御用ニテ其流域内出張巡回スルトキ手當ノ外旅費ハ給セスト雖ドモ臨時御用(鹿桑山檢分及ヒ臨時測量等ノ類ヲ云フ)ニテ其工場ヨリ繼道十里外ノ地へ派出ノ節ハ手當ノ外ニ一般ノ旅費ヲ給スヘシ尤モ其派出十日以外ニ涉ル時ハ發着ノ日ヲ以テ十五日前後ノ區分ニ據リ(發着トモ十五日前ニアルモノハ上半月十六日後ニアルモノハ下半月分)月手當ヲ廢シ右發着間中ハ一般ノ定則ニ復シ旅費日當ヲ支給スヘシ
但本文ノ類ハ局長ノ許可ヲ得サレハ出張

スルトモ旅費ハ給セサルベシ尤淀川信濃川等ノ如キ遠隔ノ地ハ事急卒ニ出ル分ニ限リ出張巡回ノ後其出張所長ヨリ事由詳記シ届出ニ上給スルコトヲ得ベシ

第五條 在勤地ニ於テ工場常務ニ服スル者ハ一切給セサル勿論ニ候得共流域内ヘ一時出張(在勤地ヨリ)ノ節ハ一般定則ニヨリ支給スベシ

第六條 工場擔任ノモノ病氣其他ノ事故ニテ引籠中一時代理ノ爲メ出張ノモノ一般ノ定則ニヨリ支給スベシ

第七條 各出張所長及ヒ會計掛ノ類ハ姑ク一般ノ定則ニ依テ支給スベシ

第八條 此規則ニ明文之レナキ分ハ總テ一般ノ定則ニヨリ處分スベシ

各川出張ノ官吏月手當表

川根利		川濃信		川 淀	
判任	等外	判任	等外	判任	等外
一等手當	三等手當	一等手當	三等手當	二等手當	三等手當
金十九圓	金十一圓	金十八圓	金十七圓	金十七圓	金十五圓
			金十圓		金九圓

御用掛 雇月給金三百五十圓未滿三十圓判任官
ニ準テ三十圓未滿ハ等外ニ準テ支給ス○同上
日給ハ三十日分ヲ精算シ月俸同様ニ見做前條
ニ準據ス

伊明 治十一年三月廿七日東京府號外ヲ以
豆七島ヲ除シ區戶長學區取締ニ達ス

學校教員并ニ雇病院醫員並雇ノ者旅費支給規則別紙ノ
通相定本年四月一日ヨリ施行候條爲心得此旨相達候事

學校教員并雇病院醫員并雇ノ者旅費支給規定

第一條 學校教員并雇及病院醫員并雇共職務上ニテ派
出巡回スル者ハ一般旅費定則ニ據リ旅費支給スヘシ

第二條 前條ノ者府廳へ三里以外ノ地ヨリ呼寄セ採用
ノ節并罷免歸郷ノ節ハ旅費定則第七章及第十七章相
當ヲ以テ旅費支給スヘシ

但學校教員ハ他管内ヨリ呼寄セシモノニ限り本文
ノ通り之ヲ給テ管内ナレハ三里以外ト雖モ一切之
ヲ給セス

學校教員旅費規則

第三條 免職ノ者其日ヨリ日數三十日以内歸郷申出ヘ

此期限ヲ過ルモノハ一切支給セサルヘシ

第四條 諸官廳在職ノ者ヲ直チニ採用シ又ハ免職後日數三十日以内ノ者ヲ採用スト雖トモ府廳へ三里以外ノ地ヨリ呼寄セサル向ハ罷免ノ節一切歸郷旅費ヲ支給セサル者トス

第五條 事故ニヨリ罷免又ハ嫌疑等ニテ鞫問中職ヲ免スル者其處決ノ上有罪ニ歸スル者ハ歸郷旅費ヲ給セ

第六條 共有金ヲ以テ支給スル雇ノ者職務上派出ノ節ハ一般旅費定則ニ據リ支給スヘシ

第七條 區戸長書記(民費支給)等派出ノ節旅費支給方ハ

明治十年八月朱引外區長申牒ノ通往返六里以上ニ至レハ旅費并滞在共日當金三十錢支給スヘシ

第八條 區戸長書記并共有金ヲ以テ支給スル雇ノ者ハ假令三里以外地ヨリ呼寄セシ向ト雖モ採用歸郷トモ都テ旅費支給セサルヘシ

乙明治三十一年七月廿七日大藏省

第三十九號ヲ以府縣ニ達

金祿公債証書下渡方ノ儀別紙ノ通相定候條証書下付ノ節ハ右ニ照準可取計此旨相違候事

第一條 金祿公債証書ハ明治十年一月一日ノ戸主ノ名前ヲ記入シテ下付スト雖モ實際証書下付ノ日迄ニ右戸主隠居スル歟除族ニナル歟若シクハ養子ノ戸主事故アツテ實家ニ復籍スル等ノコトアルハ該証書ハ必ス其家ノ跡戸主ニ讓與セシムルモノトス

第二條 此公債証書ヲ下付スルニ臨ミ戸主死亡シ相續人未定ノトキハ先之ヲ管應ニ預リ置キ追テ相續人撰定ノ上下渡スヘシ

第三條 前條ノ場合ニ於テ該家ヲ相續スヘキモノ無之

自然斷絶ニ及フ時ハ該証書ハ其遺留ノ財産ヲ引受候親戚ニ下付スヘシ若此親戚ナキトキハ之ヲ官沒スヘシ

第四條 此公債証書ヲ下付スルニ臨ミ戸主失踪中ニ係ルトキハ之ヲ其家族ニ下渡置追テ本人復歸ノ上相渡サシムヘシ若家族ナキトキハ之ヲ管應ニ預リ置キ本人年齡八十歳迄ノ内ニ復歸スレハ之ヲ下付シ八十歳ニ至テ復歸セサレハ第三條ノ通タルヘシ

第五條 前條ノ場合ニ於テ戸主失踪後親戚協議ノ上相續人ヲ撰定スルニ於テ該証ハ其者ノ所有トナスヘシ

第六條 此公債証書ヲ下付スルニ臨ミ士族ノ戸主拘留中又ハ平民ノ戸主拘留或ハ懲役中ニ係ルトキハ該証

書ハ其家族ニ下渡置追テ本人放免ノ上相渡サシムヘシ若シ家族ナキ者ハ之ヲ管廳ニ預リ置本人放免ヲ待テ下付スヘシ

第七條 前條ノ場合ニ於テ若家族無之証書管廳ヘ預リ中本人死亡シ該家斷絶ニ及フトキハ第三條ノ通りタルヘシ

第八條 平民ニシテ單身ノ者終身懲役ノ場合ニ於テハ該証書ハ管廳ニ預リ置ヘシ尤本人ノ情願ニ因テハ委託人ヘ下付スルモ妨ナシ

第九條 此公債証書ノ中隠居嫡子二三男等ノ名當コテ下付スヘキモノアリ右等ノ者ヘ証書ヲ下付スルノ際本人既ニ死亡スレハ隠居ノ分ハ直ニ其相續人ニ嫡子

二三男等ノ分ハ其子孫若クハ遺妻ヘ下付シ子孫遺妻等無之トキハ本籍ノ戸主ヘ下付スヘシ

第十條 前條ノ場合ニ於テ本人若シ失踪中ニ係ルトキハ該証書ハ先前條ノ順序ヲ以テ下渡置追テ本人歸復ノ上相渡サシムヘシ又本人年齢十八歳ニ至テ復歸セサレハ先ニ下渡置タル者ノ所有トナスヘシ尤本人失踪後跡相續人ヲ撰定スルトキハ勿論其者ノ所有タルヘシ

第十一條 本人若拘留或ハ懲役中ニ係ルトキハ是迄第九條ノ順序ヲ以テ下渡置追テ本人放免ノ上相渡サセ其放免相成ラサル中死亡スレハ先ニ下渡置タル者ノ所有タルヘシ

第十二條 士族ニテ戸主ニ非サル者除族トナリ或ハ單身ノ戸主ニテ除族ニ處セラレ跡襲族人無之者ハ該證書ハ本人ニ下付スヘシ

第十三條 九年第百九號布告ニ違ヒ賣買抵當ノ密約ヲ爲シタル者有之トモ都テ無効之約束ニ就キ證書ハ必ス其記名本人ニ下付シ本人ノ所有ヲラシムヘシ

(本朝民鑑乾ノ卷金祿公
債証書發行條例參照)

明治十一年七月廿二日
大政官第十七號布告

郡區町村編制法左ノ通り定メラレ候條此旨布告候事

第一條

地方ヲ畫シテ府縣ノ下郡區町村トス

第二條

郡町村ノ區域名稱ハ總テ舊ニ依ル

第三條

郡區域廣濶ニ過キ施政ニ不便ナル者ハ一郡ヲ畫シテ數郡トナス(東西南北上中下某郡ト云カ如シ)

第四條

三府五港其他人民輻湊ノ地ハ別ニ一區トナシ其廣濶ナル者ハ區分シテ數區トナス

郡區町村編制法

第五條

每郡ニ郡長各一員ヲ置キ每區ニ區長各一員ヲ置ク郡ノ狹少ナルモノハ數郡ニ一員ヲ置ク事ヲ得

第六條

每町村ニ戶長各一員ヲ置ク又數町村ニ一員ヲ置ク事ヲ得

但シ區内ノ町村ハ區長ヲ以テ戶長ノ事務兼スル事ヲ得

(參考) 明治十一年七月廿二日太政官號外ヲ以府縣へ達

今度第十七號第十八號第十九號ヲ以テ郡區町村編制府縣會規則地方稅規則布告候ニ付施行ノ順

序左ノ通り相心得ヘシ此旨相違候事

- 一 從前地方區畫區々ニ之アリ不都合少カラス候處今度郡町村ノ制一途ニ定メラレ候ニ就テハ各地方速カニ改正スヘシト雖モ其組替一時ニ行届キ難キ事情ノ向ハ實地都合ニ應シ漸次引直シ民間ノ混雜ヲ成サ、ル様注意ヲ加フヘシ又從前大小區ノ外組合町村ノ仕法致シ來リ候分或ハ從前郡區ノ税金又ハ共有財産ノ其性質地方一般ノ事ニ當ツ可キモノニアラサル分等ハ元來行政區畫ノ事ニ關セサル者ニ付キ其人民ノ便宜ニ任ス可シ
- 二 郡町村ノ區域ハ總テ舊ニ依ルト雖モ郡ノ境

郡區町村編制法

界錯雜シ又ハ地形不便ナル者ヲ組替及ヒ町
村ノ飛地ヲ組替フル等止テ得サル分ハ地方
長官ヨリ内務卿ニ具狀シ其許可ヲ受ケテ施
行スル事ヲ得ヘシ其大郡ヲ盡シテ數郡トシ
及ヒ市街ノ區制ヲ定ルハ政府ノ裁定ヲ仰ク
タメ地方長官ニ於テ取調ヘ内務卿ニ伺ヒ出
ヘシ

三

郡村制置ノ外都府港市ノ地人民幅濶貿易繁
昌ノ所ハ郡村ト其利益情態ヲ異ニスルヲ以
テ一般ノ郡政ト稱行スヘカラス故ニ郡ニ拘
ラス別ニ區トナシ市政ヲ以テ治ルヲ要スヘ
シト雖モ其郡變更ヲ更ニ某區ヲ置クニア

ラス即チ某郡ニ其内ニ某區アルアリ又某
區某々ノ郡ニ跨リアル等地理上ニ於テハ總
テ舊ニ依ラシムヘシ又市井一圓ヲ以テ一區
トシテ統治スヘキアリ或ハ其廣濶ニシテ統
治ニ難キヲ以テ分ツテ數區トナスアル等各
地ノ便ニ從フヘシ其分ツテ數區トスル者或
ハ第一區第二區ト稱シ或ハ某區(其地方固有
ノ名稱ヲ用ルカ如シ)ト稱スル等其便ニ從フ
要スルニ制度ニ拘ハリ便宜ヲ妨ケサル様必
得ヘシ

四

三府及ヒ其他市街ノ區及ヒ各町村ハ其地方
ノ便宜ニ從カツテ町村會議又ハ區會議ヲ開

キ及ヒ地方税ノ外人協議ノ費用ハ地價割
戸數割又ハ小間割間口割歩合金等其他慣習
ノ舊法ヲ用フルヲ勝手タルヘシ但シ町村會
區會ノ章程規則ヲ制定スル分ハ内務卿ニ届
出テ認可ヲ受クヘシ

五 地方ノ事情ニ因リ府縣會開設ノ緩急モ之レ
アルヘキニ就キ開否共地方長官ノ意見ヲ以
テ内務卿ニ具狀スヘシ

六 議員ノ員數郡區ノ大小ニ應シ均一ナラサルヘ
キニ就キ初度ノ撰舉ニ於テハ地方官ノ見ル所
ヲ以テ各郡區ノ多寡ヲ定メ更ニ議會ノ議ニ付
シ共第二度撰舉(即チ初度撰舉ヨリ第三年)ヨリ

七 ハ會議ノ議決スル所ノ員數ニ從フヘシ
地方税規則ニ依リ改正スルハ明治十一年度
ヨリ施行スルモ十二年度ヨリ施行スルモ各
府縣長官ヨリ内務卿ニ具申シテ便宜ニ從フ
ヘシ

但シ十二年度ヲ越ユルヲ得ス

八 地方税從前地所割戸數割相半シ或ハ地所幾
歩戸數幾戸ニ課スル等各地方ノ慣習一様ナ
ラサル者一切各地方ノ便宜ニ從カハシムヘシ
九 營業税及雜種税ハ別段ノ布告ニ從テ各定分
アリ該年度費用ノ多寡ヲ以テ増減アル事ナ
カルヘシ故ニ地方税ノ豫算ハ其營業税雜種

税ノ徵收額ヲ除ク外其他地價割戸數割ヲ以テ賦課スルハ其年度ノ費用ニ從ヒ増減アルヘシ

十 定リタル地方税費目ノ外猶地方ノ要用ニ屬スル項目アルトキハ内務卿ヲ經テ陳請シ特ニ政府ノ裁定ヲ仰クヘシ

十一 戸長ハ行政事務ニ從事スルト其町村ノ理事者タルト二様ノ性質ノ者ニ付其費用ノ地方税ヲ以テ支辨スヘキト町村又ハ區限リ協議費ヲ以テ支辨スヘキトハ其事務ニ就キ區分スヘシ

十二 地方税ヲ以テ支辨スヘキ事件ト町村又ハ區

限ノ協議費ヲ以テ支辨スヘキ事件トノ區分ハ凡ソ地方一般ノ利害ニ關ス可キモノハ地方税支辨ノ部ニ屬シ其町村限リ區限リ又ハ數町村共同ノ利害ニ係ルモノハ其町村又ハ區内限リ協議費ノ支辨ニ屬スヘシ

(參考) 乙 明治十年九月十八日內務省第八十三號ヲ以府縣ニ達

民費賦課之節略ヲ爲スニハ自ラ地方區畫ノ制置ニ關涉スヘキ儀モ可有之候得共追テ一般御遠有之迄ハ何等ノ事情有之共區畫ノ改正及ヒ郡村町ノ分合等ハ都テ不相成候條此旨相達候事但區町村等ノ役員ヲ減シ又ハ區役場ヲ合併ス

ル迄ニテ區畫ノ改正郡村町ノ分合ニ涉ラサル
儀ハ適宜施行不苦候事

九九〇

(參考)

明治十年十一月九日內務省
乙第四百四號ヲ以府縣へ達

本年乙第八十三號達ノ旨ニ有之處尙左ノ通可相
心得此旨相達候事

第一條

近年分合セシ町村ノ内コテ實際差問有之分復舊
ノ爲メ分合致シ候儀ハ右達ノ限ニ無之事

第二條

他ノ町村ニ點在セル飛地又ハ錯雜セル地所ハ其
所在ノ町へ可組替事

明治十一年七月廿二日
太政官第十八號布告

府縣會規則左ノ通り定メラレ候條此旨布告候事

第一章 總則

第一條

府縣會ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及其徵
収方法ヲ議定ス

第二條

府縣會ハ通常會ト臨時會トノ二類ニ別ツ其定期ニ於
テ開ク者ヲ通常會トナシ臨時ニ開ク者ヲ臨時會トナ
ス

第三條

通常會臨時會ヲ論セス會議ノ議案ハ總テ府知事縣令

府縣會規則

九九一

ヨリ之レヲ發ス

第四條

臨時會ハ其特ニ會議ヲ要スル事件ニ限リ其他ノ事件ヲ議スルヲ得ス

第五條

凡ソ地方稅ヲ以テ施行スヘキ事件ハ府縣ノ會議ニ付シ其議決ハ府知事縣令認可ノ上之レヲ施行スヘキ者トス若シ府知事縣令其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スル時ハ其事由ヲ內務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第六條

府縣會ハ毎年通常會議ノ初メニ於テ地方稅ニ係ル前年度ノ出納決算ノ報告書ヲ受ク

第七條

通常會期中議員ノ内一八又ハ數人其府縣内ノ利害ニ關スル事件ニ付キ政府ニ建議セントスル者アレハ議長ノ許可ヲ得テ之レヲ會議ニ付シ過半數ノ同意ヲ得タルトキハ其會ノ所見トシ議長ノ名ヲ以テ之レヲ內務卿ニ建議スルヲ得

第八條

府縣會ハ府知事縣令ヨリ其府縣内ニ施行ス可キ事件ニ付會議ノ意見ヲ問フコトアルトキハ之ヲ議ス

第九條

府縣會ハ議事ノ細則ヲ議定シ府知事縣令ノ認可ヲ得テ之レヲ施行スルコトヲ得

府縣會規則

第二章 選舉

第十條

府縣會ノ議員ハ郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニ五人以下ヲ撰フ

第十一條

議長副議長ハ議員中ヨリ公撰シ府知事縣令之ヲ認可シ内務卿ニ報告ス可シ議長副議長及ヒ議員ハ俸給ナシ但シ會期中滞在日當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ會議ノ議決ヲ以テ之レヲ定ム

第十二條

書記ハ議長之レヲ選ヒ庶務ヲ整理セシム其俸給ハ會費ノ中ヨリ之レヲ支給ス

第十三條

府縣ノ議員タルヲ得ヘキ者ハ滿二十五歲以上ノ男子ニシテ其府縣内ニ本籍ヲ定メ滿三年以上住居シ其府縣内ニ於テ地租十圓以上ヲ納ムル者ニ限ル

但シ左ノ各款ニ觸ル、者ハ議員タルヲ得ス

第一款 風癩白痴ノ者

第二款 懲役一年以上實決ノ刑ニ處セラレタル者

第三款 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四款 官吏及ヒ教導職

第十四條

議員ヲ選舉スルヲ得ヘキ者ハ滿廿歲以上ノ男子ニシ

府縣會規則

其郡區內ニ本籍ヲ定メ其府縣內ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムル者ニ限ルヘシ

但シ前條ノ第一款第二款第三款ニ觸ル、者ハ選舉人タルコトヲ得ス

第十五條

議員ヲ選舉セントスルキハ府知事縣令ヨリ某月間ニ選舉會ヲ開クヘキ旨ヲ布令シ郡區長ハ豫シメ選舉ノ投票ヲ爲スヘキ日ヲ定メ少ナクモ十五日前ニ之レヲ郡區內ニ公告スヘシ

第十六條

選舉ノ投票ハ豫定ノ日ニ郡區廳ニ於テ之レヲ爲シ郡區長之レヲ調査シ選舉會中ノ取締ヲ爲スヘシ

但シ便宜ニ因リ郡區廳外ニ於テ選舉會ヲ開クコトヲ得

第十七條

投票ハ豫シメ郡區長ヨリ付與シタル用紙ニ選舉人自己及ヒ被撰人ノ住所姓名年齢ヲ記シ豫定ノ日之レヲ郡區長ニ出ス可シ投票ハ多數ノ者ヲ以テ當撰人トシ同數ノ者ハ年長ヲ取り同年ノ者ハ闊ヲ以テ之レヲ定ム

但シ投票ハ代人ニ托シ差出スモ妨ケナシ

第十八條

投票終ルノ後郡區長ハ撰舉人名簿ニ就テ投票ノ當否ヲ查シ又被撰人名簿ニ就テ當撰人ノ當否ヲ查ス若シ

法ニ於テ不適當ナル者アルカ或ハ當撰人自ラ其撰ヲ
辭スルトハ順次投票ノ多數ヲ得タル者ヲ取ル

第十九條

當撰人ノ當否ヲ査定スルノ後郡區長ハ其當撰人ヲ郡
區廳ニ呼出シ當撰狀ヲ渡シ當撰人ハ請書ヲ出スヘシ
但シ當撰人各々請書ヲ出シタル後郡區長ハ其姓名
等ヲ郡區内ニ公告スヘシ

第二十條

一人ニシテ數郡區ノ撰ニ當ルトキハ其何レノ郡區ニ
屬スヘキハ當人ノ好ニ任スヘシ

第二十一條

議員ノ任期ハ四年トシ二年毎ニ全數ノ半ヲ改撰ス第

一回二年限ノ改撰ヲ爲スハ抽籤法ヲ以テ其退任ノ人
ヲ定ム

第二十二條

議長副議長ノ任期ハ二年トシ議員ノ改撰毎ニ之レヲ
公撰ス可シ

第二十三條

前二條ノ場合ニ於テハ前任ノ者ヲ再撰スルヲ得

第二十四條

議員中第十三條ニ掲クル諸款ノ場合ニ遭遇スル者ア
ルカ其府縣外ニ轉住スルカ又ハ死去シタルトキハ更
ニ其欠ニ代ル者ヲ撰舉ス其疾病等止ムヲ得サル事故
ナクシテ開會ノ招集ニ應セサル者ハ退職者トシ亦其

欠ニ代ル者ヲ撰舉ス

第三章 議則

第廿五條

議員半數以上出席セザレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第廿六條

會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第廿七條

府知事縣令若シクハ其代理人ハ會議ニ於テ議案ノ旨趣ヲ辨明スルヲ得

第廿八條

但レ決議ノ數ニ入ルヲ得ス

會議ハ傍聴ヲ許ス

但シ府知事縣令ノ要メニ依リ又ハ議長ノ意見ヲ以テ傍聴ヲ禁スルヲ得

第廿九條

議員ハ會議ニ方リ充分討論ノ權ヲ有ス然レトモ人身上ニ付テ褒貶毀譽ニ涉ルヲ得ス

第三十條

議場ヲ整理スルハ議長ノ職掌トス若シ規則ニ背キ議長之ヲ制止シテ其命ニ順ハサル者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退去セシムルヲ得其強暴ニ涉ル者ハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルヲ得

第四章 開閉

府縣會議規則

第三十一條

府縣會ハ毎年一度三月ニ於テ之ヲ開ク其開閉ハ府知事縣令ヨリ之ヲ命ジ會期ハ三十日以内トス但シ府知事縣令ハ會議ノ衆議ヲ取リテ其日限ヲ伸ルコトヲ得ルト雖トモ其事由ヲ直チニ内務卿ニ報告スヘシ

第三十二條

通常會期ノ外會議ニ付スヘキ事務アル時府知事縣令ハ臨時會ヲ開クコトヲ得但シ該會ヲ要スル事由ヲ直チニ内務卿ニ報告スヘシ

第三十三條

會議ノ論說國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルトキハ府知事縣令ハ會議ヲ中止セシメ内務卿ニ具狀シテ其指揮ヲ請フヘシ

第三十四條

會議中國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムル時ハ内務卿ハ何レノ時ヲ問ハス閉會ヲ命ジ又ハ議員ノ解散ヲ命スルコトヲ得

第三十五條

内務卿ヨリ解散ヲ命シタルキハ更ニ議員ヲ改撰スヘシ

明治十一年七月廿二日
太政官第十九號布告

從前府縣稅及ヒ民費ノ名ヲ以テ徵收セル府縣費區費ヲ
改メ更ニ地方稅トシ規則左ノ通り定メテ候條此旨布
告候事

第一條

地方稅ハ左ノ目ニ從ヒ徵收ス○一地租五分一以內○
一營業稅并ニ雜種稅○一戶數割

第二條

營業稅雜種稅ノ種類及ヒ制限ハ別段ノ布告ヲ以テ之
レヲ定ム

第三條

地方稅ヲ以テ支辨スヘキ費目左ノ如ク○一警察費○

一河港道路提防橋梁建築修繕費○一府縣會議諸費○
一流行病豫防費○一府縣立學校費及ヒ小學校補助費
○一郡區廳舍建築修繕費○一郡區吏員給料旅費及ヒ
廳中諸費○一病院及ヒ教育所諸費○一浦役場及ヒ雜
破船諸費○一管内限リ諸達書及ヒ揭示諸費○一勸業
費○一戶長以下給料及ヒ戶長職務取扱ヒ諸費○一各
町村限リ及ヒ區限リノ入費ハ其區内町村内人民ノ協
議ニ任セ地方稅ヲ以テ支辨スルノ限ニアラス

第四條

其年七月ヨリ翌年六月マテ一周年度トナシ府知事
縣令ハ其年二月マテ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費
ノ豫算並ヒニ地方稅徵收ノ豫算ヲ立テ翌年度ノ定額

地方稅規則

トナシ其府縣會ノ議決ヲ取リ其年五月ヲ以テ内務卿
及ヒ大藏卿ニ報告スヘシ其未タ府縣會ヲ設置セサル
地方ハ直チニ内務卿及ヒ大藏卿ニ報告スヘシ

第五條

非常ノ費用ハ(豫算ニ立ルヲ得サル天災時變ノ費用ヲ
云)別ニ賦課スルヲ得ト雖モ其府縣會ノ議決ヲ取リ内
務卿大藏卿ニ報告スルハ第四條ノ順序ニ從フヘシ其
急施ヲ要スル事項ハ施行シテ後報告スヘシ
但シ報告期限ハ第七條ニ依ル

第六條

地方稅徵收ノ期限ハ府知事縣令適宜ニ之ヲ定ムヘシ
第七條

府知事縣令ハ毎年七月ニ至リ其一周年度間ノ出納ヲ
計査シ精算帳及ヒ計表ヲ製シテ内務卿及ヒ大藏卿ニ
報告スヘシ且翌年通常會議ノ初メニ於テ之ヲ府縣會
ニ報告スヘシ

(參考) 明治三十一年七月廿二日太政
官第三十號ヲ以テ府縣ニ達

今般第十九號布告ノ通り地方稅ヲ以テ支辨スヘ
キ費目相定メ候得共右費目中官費支出ニ係ル者
ハ猶從前ノ通り下ケ渡スヘク候條此旨相達候事

明治九年十月廿三日太政官第十
九號ヲ以院省使廳府縣ニ達

陸軍武官恩給例罷役俸并恤金令及將官退職令等別冊ノ
通被定候條此旨相達候事

但明治八年四月四十八號陸軍武官傷疾扶助死亡ノ
者祭家家族扶助概則ハ相廢候事

陸軍恩給例

總則

第一條 陸軍恩給ハ軍人奉仕中諸種ノ功勞ニ依テ獲ル
者ニシテ其種類ヲ別ツテ左ノ如シ

第一 恩給 服役停年ト傷疾疾病トニ由ル者ナリ其
給額ハ服役ノ長短傷疾疾病ノ輕重其軍人ノ官階并
ニ在職中ノ停年ニ從テ各差等アリ

第二 寡婦扶助料 其給額ハ亦其夫ノ官階ト死没ノ
緣故トニ由テ差アリ

第三 孤兒扶助料 其給額上ニ同シク差アリ

第四 罷役後恩給 上長官士官准士官并會計軍醫馬
醫軍樂各部右同等ノ輩服役十五年以上ノ者ニ給ス
ル處ニシテ其給額服役停年ノ長短ニ準ス

以上四種ノ恩給并ニ扶助料ハ大藏省ヨリ別途ニ支
給スル者ナリ

第五 罷役俸 上長官士官准士官并ニ會計軍醫馬醫
軍樂各部右同等ノ輩服役十一年ヨリ十五年未満ニ
テ罷役ニ入ル者ニ給スル處ナリ

第六 罷役恤金 恩典トシテ一號休暇ヲ賜ヒ歸郷セ

陸軍武官恩給例

シメタル下士兵卒并ニ同等ノ輩ニ給スル處ナリ
以上二種ノ給料ハ陸軍ノ各年定額表ニ載セテ陸軍
省ヨリ支給スル處ニシテ罷役俸并罷役恤金令アリ
後ニ付ス

第二條 恩給寡婦扶助料罷役後恩給ノ三種ハ其本人ニ
生涯之ヲ給スヘシ

孤兒扶助料ハ其孤兒男女共ニ二十才ニ至レハ之ヲ止
ム罷役俸ハ其上長官士官准士官并會計軍醫馬醫軍樂
各部右同等ノ輩服役停年ノ半期ニ准シテ
年ナレハ其半期 其年間之ヲ給シ罷役恤金ハ二個年ヲ
即チ六年トス 然レハ之ヲ更新スルコトヲ得ヘシ
以テ限リトス 凡ソ此各種ノ支給料ハ當該人名存生ノ中ハ之

ヲ支給シテ停止スルコトナシ但シ公借隊内借財并身代
限ニ處セラル、キモ其引ク處給額五分ノ一ニ過クル
ヲ得ス

第四條 凡陸軍恩給ヲ受ルノ權ハ次ノ事故アレハ之ヲ
止メ或ハ其時間之ヲ停ム

第一 破廉耻甚ノ者或ハ管刑或ハ懲役實決以上ノ處
斷ヲ受ルキ

第二 事故アリ日本人タルノ分限ヲ失フ者

第三 政府ノ許可ナシシテ帝國外へ出ル者
恩給

第五條 恩給停年ニ基ク者ハ最下限ヨリ最上限マテノ
差等アリ最上限ニ越ルコトハ此後第十一條第一節及ヒ

陸軍武官恩給例

第七十八條ニ揭示スル者ニ係ルノ外絶テアルコトナシ
 第六條 最下限ヲ受ルノ權ハ上長官士官准士官并會計
 軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役實期二十五年ニ滿
 ル者之ヲ獲ヘシ又上長官士官准士官并會計軍醫馬
 醫軍樂各部右同等ノ輩服役實期二十年ニ滿ルノ後一
 時ノ疾病ニ由リ三年以上非職ヨリシ者查問會議ニ因
 テ再ヒ現役ニ復ス可ラサル者ナリト處決スルトモ其
 官階ニ准スル最下限ノ恩給ヲ受ルノ權利ヲ有ス但從
 軍年ヲ算入スルノ恩典ナシ
 下士兵卒服役實期十五年ニ滿ル者ハ最下限ノ恩給ヲ
 受ルノ權利ヲ有ス

第七條 恩給ノ最上限ハ服役四十五年ニ滿ルノ上長官
 士官准士官并會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩三十
 五年ニ滿ルノ下士兵卒并同等ノ輩之ヲ受ルノ權利ヲ
 有ス

此故ニ上長官士官准士官并會計軍醫馬醫軍樂各部右
 同等ノ輩ハ滿二十五年以上下士兵卒并同等ノ輩ハ滿
 十五年以上毎年最下限ヨリ最上限ニ至ル差二十分一
 ノ比例ヲ以其受ル處ノ給額ヲ增加ス但此年數ニ從軍
 年ヲ算入スルハ後ノ第四十二條ニ揭示スルカ如シ
 傷痕疾病總則

第八條 戰地若シハ公務中偶然ノ事故ニ由テ重傷ヲ受
 不治ニ至ル者ハ恩給ヲ受ルノ權利ヲ有セシム
 重病ノ人陸軍服役ノ疲勞危難ヨリシテ發シ不治ナリ

陸軍武官恩給例

ト認メラル、者亦同シク此權利ヲ有セシム

第九條 其傷痰疾病或ハ盲目トナリ或ハ切斷ニ由リ又

ハ其傷病ニ由リテ全ク一肢以上ノ用ヲ失フ者ニハ直

ニ恩給ヲ受クルノ權ヲ有セシム然レモ其傷痰疾病右

ノ重症ニ比シテ一層輕キ者ハ次ノ事情アルニ至ラサ

レハ之レヲ有セシムルコトナシ

第一 上長官士官准士官并會計軍醫馬醫軍樂各部右

同等ノ輩ハ其傷病ニ因テ現役ニ堪ヘサル者年ヲ經

ルト雖モ竟ニ復役スヘキ目途ナキモ

第二 下士兵卒并同等ノ輩ハ其傷病ニ因テ服役スヘ

カラスモテ糊口ヲナスコト能ハサルモ

第十條 上條ノ道理ニ基キ凡テ服役ノコトニ關カラサル

疵傷其他體質薄弱若クハ老衰若クハ世上一般ノ疾病

ニ罹ル者ハ此限ニアラス

部類定目

第十一條 恩給ヲ給スルノ本則ハ其由テ以テ此ニ至ラ

シムルノ源因ノ輕重ニ準シテ差等アルコト次ノ如シ

第一 其兩眼ヲ盲シテ不治ニ至ルト并ニ切斷ニ由テ

二肢ヲ亡スト此ニツキ罹ル軍人ハ何ノ官階ヲ論セ

ス停年恩給ノ最上限ノ上ニ上長官士官准士官并會

計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ其給額百分ノ二

十下士兵卒并同等ノ輩ハ百分ノ三十ノ増額ヲ受ク

但其服役ノ長短ヲ論スルコトナシ

第二 一肢ヲ切斷シ若クハ全ク二肢ノ用ヲ失フニ至

陸軍武官恩給例

ル軍人ハ何ノ官階ヲ論セス唯最上限ノ額ヲ受ク但
其服役ノ長短ヲ論スルコトナシ

第三 其傷疾疾病全ク一肢ノ用ヲ失フニ至リ若クハ
之ヲ失フコトナキモ之ヲ失フニ等シト認ムル所ノ軍
人ハ何ノ官階ヲ論セス又其服役長短ヲ問ハス先ツ
停年恩給ノ最下限ヲ以テ之ニ當テ而シテ後ニ服役
ノ年度ニ照シ恩給最下限ヨリ最上限ニ至ル差ノ二
十分一ヲ加ヘタル給額ヲ受ルノ權利アリトス然レ
モ其給額最上限ノ高ニ至レハ其上増加スルコトナシ
但此服役年數ニ從軍年ヲ算入ス

第四 其傷疾疾病前項ニ比スレハ一層輕キモノニシ
テ自己ノ用辨ニ差支ナキモノハ最下限ノ額ヲ一時

限リ給ス但服役停年從軍年ヲ算入スニ由リ最下限ノ恩給

ヲ受クルモノハ此一時限リハ給セスト雖モ其罷役
後恩給或ハ罷役奉并恤金ヲ受ルニ止マルモノハ別

ニ此一時限リヲモ給スベシ

第十二條 其他後ノ第七十九條ニ揭示スル所ニ係ル者
ハ給額ノ差數五分ノ一ヲ以テ之ニ増加スルコト得ヘ
シ

寡婦孤兒扶助料

第十三條 恩給ヲ受クヘキ夫ノ死後ニ於テ其夫ノ官階
ニ屬セル停年恩給ノ最上限ノ半數ト定メ生涯之ヲ受
ルノ權ヲ有スル寡婦ハ次ノ如シ

第一 戰地若クハ公務ニ於テ殺害ヲ受ケタル軍人ノ

陸軍武官恩給例

寡婦

第二 内地若クハ日本外ノ軍中ニ於テ或ハ戦争ノ事故ニ由リ或ハ傳染疫癘ニ罹リ其他服役ノ義務ヲ奉スル爲メニ死没シタル軍人ノ寡婦

第三 戦地ニ於テスルト公務ニ於テスルトヲ論ゼス其傷痕ニ因テ終ニ死ニ至ル軍人ノ寡婦

第十四條 恩給ヲ受クヘキ夫ノ死後ニ於テ其夫ノ官階ニ屬セル停年恩給最上限ノ四分一ニ均シキ給額ヲ生

涯受クル權ヲ有スル寡婦ハ次ノ如シ

第一 其夫既ニ恩給ヲ受ケテ死シ後ニ遺レル寡婦

第二 其夫未タ之ヲ受ケスト雖モ受ヘキ權ヲ有シテ死シ後ニ遺レル寡婦

總テ寡婦ハ陸軍卿ノ許可ヲ受ケ令式ノ婚配ヲ行ヒ其夫ノ現役ヲ去ルノ前即チ陸軍俸給ヲ離ル、キヨリ一今年以前ニ嫁シタル者タルヘシ然レモ其夫致仕ノ以前ニ前時ノ配偶若クハ此配偶ヨリ生シタル兒子アルハ嫁時ノ年月ヲ査確スルニ及ハス

第十五條 寡婦其家ヲ去リ若クハ再婚スルモ扶助料ヲ望ムノ權ナシ此場合ニ於テハ兒子本腹妾腹ヲ分クモル者ハ之ヲ孤兒ト見做スヘシス其戸籍ニ登記

第十六條 其寡婦死去シ或ハ再婚等ノ事故アリテ其扶助料ヲ受ルノ權消絶スルモハ其權其軍人ノ一子若クハ數子ノ幼年ナル者アルハ其數ニ拘ラス是ニ轉移シ寡婦ノ受クヘキ扶助料ト均シク年々其扶助料ヲ受ル

陸軍武官恩給例

ルヲ得ヘシ

第十七條 此道理ニ基ツキ其軍人ノ死スル前ニ母ノ死

シタル孤兒ハ其母ノ受クヘキ扶助料ヲ直ニ受クヘシ

第十八條 凡ソ養子ハ唯嗣子タル者ニ限リ二十才未滿

ナレハ之ヲ受クルノ權利ヲ有ス若シ其軍人生前ニ其

女子ヘ養子ヲナスト雖モ未婚中ナレハ第十六條ノ

例ニ準スヘシ但其養子ト婚配スレハ男女トモ其權消

絶ス

第十九條 此扶助料ハ孤兒幼年ノ間ニ限ル者ニシテ男

女共ニ二十才ニ至ルマテ其期トシ其期ニ達スレハ其

權轉シテ次子ニ移ル者トス

退職料ヲ願フ總則

第二十條 服役停年ニ付テ退職ノ恩給ヲ願フハ服役定

期全ク滿ツルノ前ニ非レハ之ヲ願フヲ得ス

第二十一條 此故ニ各軍隊ニ於テハ毎年一次ノ外ハ退

職恩給願ヲ軍人ニ許可セサルヲ以テ常則トス

其願書ハ總テ各年檢閱使定期檢閱ノ前一个月ニ於テ

証據ニ供スヘキ書類ヲ副ヘ之ヲ本隊ノ會計會議ニ移

呈スヘシ

此會議ニテ願人ノ申告シタル事實ヲ查照シ其服役ノ

明細書并ニ願意ノ証據ニ供スヘキ書類ニ調印シ其是

非テ當人ニ説諭シ而シテ後ニ總テ此書類ヲ檢閱使ニ呈

スヘシ此例ニ外ナル者左ノ如シ

第一 其下士以下隊内ニ在ル者定期十五年ニ滿ルノ

陸軍武官恩給例

キニ入隊ノ約期モ盡ル者ニ就テハ此期限前ニ合式ノ願書ト証據ニ供スヘキ書類トヲ併セテ入隊約期満限ニ至ル日ニ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈スヘシ此場合ニ於テハ該官ハ檢閱使ノ任ヲ行フヘシ

第二 戰地ニ於ケル重傷重病ノ事故ニ基ツキタル恩給ハ總テ之ヲ急速ニ取扱フヘシ故ニ此場合ニ於テハ一團隊ノ首帥檢閱使ノ任ヲ行フヘシ

第三 其他急速ヲ要スル場合ニ於テハ四季ノ閱兵ノキニ鎮臺ノ司令將官自ラ檢閱使ノ任ヲ行ヒ或ハ部下ノ司令官ヲシテ之ヲ代理セシムルコトアルヘシ

第二十二條 凡テ恩給ノ進達文ハ其緣故ヲ開列シ服役并從軍ノ事實ヲ表章シテ願人ヲシテ恩給ヲ受領スル

ニ適當ナラシムルヲ以テ主トスヘシ

第二十三條 其軍人軍隊中ニ編制セラレタルトハ其軍隊ノ會計會議ノ注意ヲ以テ其願書ヲ呈セシムヘシ

第二十四條 其進達文ノ外ニ次ノ書類ヲ悉ク取揃ヘ一纏メトナシテ之ヲ呈スヘシ

第一 願人ノ緣故ヲ開列シタル願書 是ハ會計會議又ハ之ヲ所轄スル官廳等ノ長官ニテ署名調印ス

第二 身元履歷書 是ハ郷貫職業移住年月等ヲ詳カニシ且生年ヨリ陸軍出身マテノ履歷ヲ表シ兼テ父母妻子等ノ姓名ヲ載セタル者

第三 服役并ニ從軍ノ明細書 是ハ隊中ノ帳簿ヨリ凡テ該名ニ關係スル條款ヲ抄出シタル者但此書ニ

陸軍武官恩給例

ハ本人調印スヘシ

第四 上包 是ハ會議又ハ此願書ヲ移轉スル官人ニ
テ作ル所ニシテ番號并ニ包中書類ノ番號ヲ表記シ
願書并附屬ノ諸書類ヲ之ニ包收シ仍ホ其遺脱ヲ防
シ爲ニ絲帶ヲ施スヘシ

第二十五條 此書類ハ檢閱使若クハ四季ノ閱兵ヲナス
將官ノ閱兵期日一个月前ニ其管ノ司契ニ送付シ司契
之ヲ合格ナリト認ムルキハ檢印署名シ該臺ノ司令將
官ニ呈シ將官一覽ノ上異議ナキニ於テハ直ニ會議ニ
返送シテ其檢閱ヲナス將官ニ呈セシムヘシ
將官其人姓名ヲ檢査スルノ後會議ヲシテ恩給許可ヲ請
フノ進達帖ヲ作ラシメ而シテ監督查照ヲ遂ケ將官之ヲ

可トスルノ後其帖ト諸書類并其願書ニ就テ自己ノ意
見ヲ記シタルトテ併セテ其包内ニ入レ之ヲ陸軍卿ニ
呈スヘシ

第二十六條 其軍人或ハ隊中ニアリ或ハ他ノ麻署等ニ
屬シテ遠隔ノ地ニ在リ送達爲シ易カラサルキハ鎮臺
ノ司令將官ノ命ヲ以テ司契ヨリ其出ス所ノ願書ヲ近
傍ニ駐劄スル兵隊ノ會計會議ニ送達シテ事ニ從ハシ
ム

第二十七條 陸軍卿ハ其軍人服役ニ堪ヘサル者アソハ
公命ニテ之ニ退職恩給ヲ願ハシムルコトアルベシ
其願書送呈ノ法ハ前數條ニ擧ケタル所ニ異ナルヲナ
シ又傷痍疾病ニ由ルモノハ後ノ第四十九條ニ擧ルカ

如シ
 上長官士官并會計軍醫馬醫各部右同等ノ輩ニ對シテ
 ハ陸軍卿ヨリ旨ヲ諭シ准士官以下ノ服役十五年ニ滿
 タル者ハ其隊ノ長官其服役ニ堪ヘサルヲ認メタルモ
 ハ其旨ヲ諭シテ退職ヲ願ハシムルヲ得然レモ其願
 書ハ猶其部ノ檢閱使ノ手ヲ歷テ陸軍卿ニ呈スベシ
 第二十八條 其他軍人ハ一定ノ年齢ニ至リタルモ其
 退職恩給ヲ獲ルコトニ就テ定メタル年限滿期ノ者ハ其
 服役ヲ辭シテ致仕スルヲ例トス其年齡定限ハ左ノ如
 シ

監督 軍醫監 藥劑監 六十

參謀大中佐 副監督 司契 軍吏正 五十七
 軍醫正 藥劑正 馬醫官
 大中佐 參謀少佐 監督補 司契副 五十四
 軍吏 軍醫 劑官 馬醫
 少佐 參謀大尉 軍吏副 軍醫副 五十一
 劑官副 馬醫副
 大尉 參謀中尉 軍吏補 軍醫補
 劑官補 馬醫補 樂長 砲工兵上等監護 四十八
 砲工兵監護 監查 諸工長 同下長
 中少尉 四十五
 下士兵卒并同等ノ輩 三十五

第二十九條 前條ノ年齡定限アリト雖モ猶任用ニ堪ユ

陸軍武官恩給例 一〇二七

若クハ材能特抜ナル者ニ於テハ上長官士官并會計軍醫馬醫各部同等ノ輩ハ陸軍卿ヨリ留任ヲ命シ准士官以下ハ所部ノ長官ヨリ請求シテ留任ヲ請フヲ得ヘシ但強テ致仕ヲ願フハ此例ニ非ラズ

第三十條 其他軍法會議ノ列位要塞參謀科文庫主管等老練ノ人ヲ要スル職務ハ皆陸軍卿上條ノ例ニ準シ時宜ニ依テ之ヲ取捨スヘシ

服役期限算則

第三十一條 凡ソ恩給ノ爲ニ服役年限ヲ算計スルノ法ハ陸軍ニ於テハ二十才未滿ヲ算スルコトヲ得ス二十才未滿ノ者ハ當人自己ノ意ヲ以テ就役ノ約ヲ結ビ得サルモノトス

第三十二條 服役年限ノ始期ハ左ノ如シ

其一 明治四年八月ヲ以テ始期トス故ニ其以前ヨリ勤仕ノ者ト雖モ都テ同月ヲ以テ始メトス

其二 徵兵ハ入營初日即チ毎年四月二十日ヨリ起算スベシ

其三 壯兵其他諸種ノ方法ニテ入隊ヲ得ル者ハ入隊當日ヨリ起算スベシ

第三十三條 徵兵補充兵ノ後來入隊シタル者恩給ヲ受ルニ至ルノ期ハ其補充兵在役ノ期ヲモ算シ常備入營期日即チ四月二十日ヲ以テ起算スヘシ

第三十四條 其軍人一時旗下現役ニ就クノ後轉シテ後備軍以上士ニ入ル者ハ何等ノ名義タルヲ論セス後備

陸軍武官恩給例

軍ニ在ルノ時日ヲ服役實期トシテ之ヲ算ス 此條現今未タ行ハス

第三十五條 其軍人海軍ニ奉仕シ其恩給ヲ受ルノ權ヲ有スル者合格ノ故ヲ以テ轉シテ陸軍ニ奉仕スル者ハ以前海軍服役ノ實期ヲ以テ陸軍服役ノ實期ト通算スルヲ得文官ヨリ武官ニ轉スル者ハ以前奉仕ノ時日ヲ以テ陸軍服役ノ實期ト通算スルヲ得ス

第三十六條 服役ノ算計第三十一條ノ如シト雖モ陸軍士官學校生徒并ニ教導團生徒成業ノ上士官下士ニ任スル者ハ其學期ノ若干ヲ論セス概シテ就任ノ前二年ヲ通算スルヲ得幼年學校ノ生徒ハ滿十七才ニ至リシヨリ通算スルヲ得軍醫部ノ士官以上ハ軍醫判官

ノ別ナク又陸軍軍醫學校ヨリ出身スルト他ヨリ出身スルトヲ論セス其軍醫補ニ任スルノ日ヨリ前三年ヲ通算スルヲ得馬醫部ノ上長官士官下士モ亦軍醫ト同シク馬醫生ニ任スルヨリ前二年ヲ通算スルヲ得ヘシ以上生徒通算ノ年數如斯定ムト雖モ學校長官ノ証書ニ因リ或ハ之ヲ延縮スルコトアルヘシ

第三十七條 其他火工銃工等ノ生徒ハ十七才以上ハ奉命ノ日ヨリ十七才以下ハ滿十七才ニ至リシヨリ停年恩給ヲ受クルノ例ニ算入スルヲ得

第三十八條 若國民軍ヲ現役ニ徵發スルヲアツテ既ニ恩給ヲ受ケテ退職シタル軍人再ヒ國民軍現役ニ就クハ其恩給ハ其現役ノ給料ト共ニ之ヲ受クルヲ得

陸軍武官恩給例

シ然レハ前後ノ服役實期ヲ通算シテ其恩給ヲ増加ス
ルヲ得ス但シ從軍傷疾疾病ノコトアレハ其時ノ殊典ニ
從フ

第三十九條 其上長官士官准士官并ニ會計軍醫馬醫軍
樂各部右同等輩服役實期未タ二十五年ニ滿タル前
免官セラレ後再ヒ現役ニ復シタル者ハ免官以前ノ服
役時日ヲ恩給ノ期限内ニ算入スルヲ得但中間斷ノ
時日ハ之ヲ除クヘシ(非職ハ其非職中ノ年數モ合算ス)
其官階前後同等ナルキハ直ニ其官階ニ屬スル恩給
ニ從フ然レハ復役ノ時ノ官階前時ヨリ降ルキハ退職
ノ月其官階ニ屬スル恩給ノ外ヲ望ムノ權ナシトス
第四十條 逃亡以前ノ服役モ亦其以後ノ服役ト通算ス

ルコトヲ得ヘシ然レハ後ノ服役ハ處刑後復隊ノ日ヨリ
起算ス

第四十一條 凡ソ軍人服役中懲罰五日以上ニ上ル者ハ
除テ算セズ其餘算ノ法七日マテハ一个月ヲ除キ二七
日ハ二个月ヲ除キ三七日ハ三個月ヲ除キ四七日ヨリ
三個月迄ハ半年ヲ除キ三個月以上六個月十五日迄ハ
半年ヲ除キ除ハ其實期ヲ算シテ之ヲ除ク例ハ六個
月一年ト一日ヲ除キ六個月ト二十
日ハ一年ト十日ヲ除ク以下皆准之
從軍年ノ算則

第四十二條 軍人停年恩給ヲ受クヘキ服役期限ニ達ス
ル者ハ其年限ノ中ニ從軍年ヲ算入スルヲ許ス其法左
ノ如ク

陸軍武官恩給例

第四十三條 其實期ノ中ニ從軍年ヲ二倍シテ算入スル
ハ戰時日本外ノ戰地服役

第四十四條 其實期ノ中ニ從軍ヲ全年トシテ算入スル
ハ

第一 内地戰時ノ定メコテ戰闘ニ因テ世ノ靜謐ヲ復
スルニ與カリテ力アルキ

第二 戰時平時ヲ論セス日本外ノ地ニ於テ鎮戍シタ
ル軍隊ニアルキ

第三 海戰ノ時ニ當リ其船中ニアルキ

第四 平時新嘉坡ヨリ西ニ聖佛朗士西哥ヨリ東ニ差

遣シテ服役セシメタル軍人

第五 北海道ノ衛戍其他該地ニ半年以上札駐スル兵

役ニ服シタル軍人

第四十五條 實期ノ中半數トシテ之ヲ算入スルハ海戰
ノトニ當リ海岸防禦ノ服役

第四十六條 戰時虜獲ニ逢ヒ外國ニ俘囚トナリヨルキ
ハ猶現役ニ在ルカ如ク之ヲ算ス

第四十七條 凡ソ恩典トシテ從軍年ヲ算スルノ法ハ其
期十二个月ニ足ラサル者ト雖モ之ヲ滿一年トシテ算
ス然レモ十二个月間假令ヒ數回ノ軍役ニ從フト雖モ
之ヲ二年以上トシテ算スルヲ許サス其一期一年以
上ニ跨リ十二个月ニ餘ル所ノ分數ハ之ヲ全一年トシ
テ算スルヲ得

第四十八條 從軍年ヲ算入シ及ヒ刑罰ニ因テ除キタル

年月ヲ折算シテ其計算ヲ進達書ノ裏面ニ記載スヘシ
傷痕疾病ノ願書ニ就テ別段ノ處置

第四十九條 凡ソ傷痕疾病ニ由テ退職恩給ヲ願フハント
欲スル者ハ其服役ヲ離ル、前ニ之ヲ願フヘシ

第五十條 如此キ軍人ハ傷痕疾病ノ原因ニ依リ合格ノ
年齢ノ前ニ恩給ヲ得ント欲スルヲ以テ其傷痕疾病ノ
原因並候トモ極メテ曲節ヲ悉ク之ヲ陳述スルヲ必要
タリ

第五十一條 其傷痕疾病ヲ受ケシ事故并原因ハ之ヲ証
明スヘキ公ケノ報告若クハ他ノ公文ニ係ル書類ヲ據
証トナシ疾病ヲ受ケシ時刻并ニ其時ノ景況ハ陸軍官
憲ノ(戦地ノ司令官分遣隊ヲ司令スル下士大隊長幕員

士官等ニテ二人若クハ三人ノ証人ノ前ニテ認メタル)
証書ヲ據証トシ又ハ其官憲ヨリ發シタル報告若クハ
査問會議ノ書ヲ據証トナスヘシ

右ノ據証ニ供スル書中ニハ其傷痕ノ性質及ヒ之ヲ受
ケタル時刻之ヲ受ケタル地所并戰爭間ニテモ公務上
ニテモ之ヲ受ケタル時ノ景況ヲ特別ニ奉章シ又凡テ
醫家ノ診断ニテ不治トナス者ハ悉ク之ヲ記載スヘシ

第五十二條 其傷痕疾病ノ不治ナルヲハ陸軍病院ノ病
院長若クハ最後ノ治癒ヲ施シタル市井病院ノ醫長ヨ
リ特別ノ証書ヲ以テ之ヲ確証スル者ニシテ此証書中
ニ傷痕疾病ノ原因症候是ニ施シタル醫療ノ方法ヲ述
ベ以テ其不治ナルヲ明ニ申述スヘシ其軍人右ノ病

院ニ就テ治療ヲ受ケサル者ニハ陸軍病院若クハ市井病院ノ醫長診察ノ上ニテ証書ヲ授クヘシ

第五十三條 退職ノ願書ハ其軍人ノ屬スル隊ノ會計會議若クハ鎮臺司令將官ヨリ指定シタル隊ノ會計會議ヨリ其保證書類ト共ニ司契ニ送付ス司契此書類凡テ例規ニ合ヒタルモノト認ムルキハ之ニ檢印署名之ヲ鎮臺司令將官ニ呈ス是ニ於テ司令將官ヨリ軍醫正二員並ニ初メ証書ヲ認メタル者ノ外其隊ニ屬スルト他隊ニ屬スルトニ論ナク軍醫若クハ軍醫副補ノ内二人ヲ命シ之ヲ檢査セシム

第五十四條 其命セラレタル所ノ軍醫ハ司契並ニ其隊ノ會計會議員ノ前ニテ檢査ヲナシテ後檢査口供ヲ作

ルヘシ而シテ此時兩軍醫ノ診斷否ナル時ハ其恩給願ハ他日ニ延ハシ司契ハ兩軍醫ノ口供書ヲ取り之ヲ記室ニ納ムヘシ總テ檢閱使又ハ平常ニテハ鎮臺司令將官ハ如此キ場合ニ於テハ其兩軍醫ヲシテ手術ヲ行ハシムルヲ得

第五十五條 其兩軍醫ノ檢査ニテ當該軍人退職恩給ヲ受ルノ權アリト認ムルキハ兩軍醫更メテ診斷書ヲ作ルヘシ此証書ハ別ニ一通ノ寫ヲ作り先ノ口供書ニ綴リ込ミ一包トナシテ檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官ニ呈スヘシ

第五十六條 檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官ハ此書類並ニ檢査口供書ヲ一覽シタル後先キニ命シタル二員

陸軍武官恩給例

ノ軍醫正ヲシテ其面前ニテ查覈ヲナサシムヘシ而
テ司契ハ此查覈ヲ助ケ此查覈ニ就テ再ヒ口供書ヲ作
リ而シテ二員ノ軍醫正ハ証書ヲ作テ口供書ニ綴リ
返マシムヘシ

第五十七條 此查覈ヲ經テ願意本ツク所アリト認メマ
ルキハ檢閱使又ハ檢閱ヲナス司令將官之ヲ會計會議
ニ下シ退職恩給許可ヲ請フノ進達狀ヲ作ラシメ而シテ
監督查照ヲ遂ケ將官可トスルノ後其帖ト諸書類并ニ
其願書ニ就テ自己ノ意見ヲ記シタルト併セテ其包
内ニ入レ之ヲ陸軍卿ニ呈ス

第五十八條 其軍人屬スル所ノ隊ヨリ離レテ遠方ニア
ル者ハ該臺ノ司令將官ノ命ニテ其近隣ノ隊ニテ其願

書ノ扱ヒヲナサシムヘシ

第五十九條 恩給ノ願文ハ一次ニ服役停年ト傷痕疾病
トヲ注意トシテ之ヲ認ムルコトヲ得ス其軍人停年ノ恩
給ヲ受ル權利ヲ有シ同時ニ傷痕疾病ノ恩給ヲ願ハ
ト欲スル者ニハ先ツ其願文何レノ式ヲ用ニヘキヤ
ト問ヒテ其自ラ撰フ所ニ應スヘシ

第六十條 上長官士官准士官并會計軍醫馬醫軍樂各部
右同等ノ輩服役實期十五年以上ニ至リ病氣ニテ三年
來非感ニ在リ現役ニ復ス可テナルガ爲ニ退職ヲ請サ
ル、者ハ初メニ查問會議ニ於テ之ヲ檢査シ會議ノ商
評之ヲ應當ナリト決スルキハ直ニ退職ノ進達帖ヲ作
ラシム此進達帖會議ノ口供書ト共ニ陸軍卿ニ達スル

陸軍武官恩給例

ハ、卿之ヲ處分シ該官ヲシテ退職ニ因テ罷役後恩給ヲ受ルコトヲ得セシム

服役ニ在ラサル軍人特別ノ處置

第六十一條 停年ニ就テ恩給ヲ仰クノ權アル軍人登時事故アリテ服役ヨリ引去リタル者ハ其願書ヲ要用ノ書類(服役ノ明細書并ニ身元履歷書)ト共ニ取揃ヘテ其軍管ノ鎮臺ノ司契課ニ致スヘシ司契課ニテ之ヲ檢査シ書類ニ檢印署名シ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈スヘシ
第六十二條 其軍人傷痍疾病ノ爲ニ増給ヲ請フ者ハ左ノ方法ニ從フヘシ
若其傷痍疾病ニ因テ既ニ恩給ヲ受ルノ後引續キ重症ニ趣キ一肢ヲ失フニ至ラシメタル時ハ當該軍人其恩

給ニ就テ更ニ増算スルコトヲ得ヘシ

又第一號休暇ヲ得テ罷役ニ入りタル後其傷痍疾病以來引續キ重症ニ至リタル軍人上ト同一ノ事情アルニ臨ンテハ恩給ヲ仰クコトヲ得ヘシ但シ前ノ第九條ニ揭示スル所ノ症候アル者ニ限ルヘシ

凡テ如此キ軍人ノ情願ハ其現役ヲ離レヨリ算シテ一年内ナレハ之ヲ達スルコトヲ得ヘシ然レハ其傷痍疾病一肢ノ切斷ヲ促シ或ハ兩眼ヲ盲スルニ至リタル者ニハ延イテ三年内ニ至ルヘシ

第六十三條 其願書ハ鎮臺ノ司契課ニ致シ其保証ノ書類ヲ副フヘシ其書類ハ

第一 當該軍人服役ヲ離レシ時其傷痍疾病ハ例規ニ

準シ查覈ヲ受ケタルヲ証スル諸公文

第二 現役ヲ退キタルヲ証スル休暇免狀并ニ諸公文

第三 軍醫ノ診察口供書并診断証書 是ハ軍人市井

ノ籍ニ復セヨ以來其療用ヲ受ケタル軍醫ヨリ其傷

痕疾病引續キ重症ニ變シタルヲ以テ退職恩給若ク

ハ計算増加ヲ願フニ至ルヲ証スル者

但軍醫ナキ地方ニ於テハ市井ノ醫員執七一八外

二人ニテ診断シ府縣廳ノ役員立會ノ上証書ヲ認

メ役員與印シテ所管鎮臺ノ司契課ニ致スヘシ

第六十四條 司契課ニテ之ヲ受ケタル時其日附ヲ檢シ

期限内ニ在リハ鎮臺ノ司令將官ニ呈シ將官一覽ノ後

再ヒ司契課ニ下シ前時ノ書類ト照査シ前時ノ軍醫正

ヲシテ其口供書ニ就テ之ヲ檢實セヨメ非違ナキ時ハ

將官ヨリ前時ノ隊若クハ近傍ノ會計會議ニ下シテ第

二十四條并第四十九條以下ノ例ニ從ハシム

司契課ニテ之ヲ受ケタル時其日附ヲ檢シ若期限外ニ

在リハ之ヲ還付ス然レド司契課故ナク之ヲ收受セサル

キハ當該ノ軍人直チニ司令將官ニ歎訴スルヲ得

寡婦孤兒ニ就テ特別ノ處置

第六十五條 寡婦扶助料其夫ノ傷痕ニ基ツク者ハ其傷

痕ヲ受ケタル事故ト傷痕ノ質トノ照査ニ供スヘキモ

ノアルヲ主トスルノ前條軍人ノ傷痕ニ就テ揭示スル

所ノ如シ而シテ之ヲ証スル者ハ軍醫若クハ市井醫員

ノ公文証書ニシテ其文中ニ當該ノ患者竟ニ其傷痕ニ

由テ死ニ至リシヲ陳述スヘシ
 若其死没一旦傷痕平復ノ後ナルキハ其寡婦第十三條
 第十三款ニ揭示スル處置ヲ仰クコトヲ得ヌ故ニ其死
 去戰地ノ事故ニ源因スル時ハ其証據ニ供スヘキ公ケ
 ノ報告若クハ其官憲ノ報告或ハ查問會議ノ書類等ノ
 内其一ヲ以テ保証ニ供シ且上ニ擧ケタル醫員ノ証書
 ニテ共事故直チニ當該軍人死没ノ源因タルヲ明証ス
 ヘシ此兩証チ有スレハ其寡婦共夫ノ死去ノ日其住ス
 ル區ノ戸長ニ報スル死去ノ証書中ノ日附ヨリ六個月
 以内ニ其願書ヲ呈スルヲ許ス
 第六十六條 其死没ノ源因疫癘傳染ニ係ル者ハ其証據
 ニ供ス可キ者左ノ如シ

- 第一 府縣若クハ陸軍官憲ノ証書是ハ其軍人死去ノ節其死去セシ地方ニ於テ其疫疾流行セシコトヲ証スル者
- 第二 陸軍官憲ノ証書 是ハ當該軍人ノ死没其服役中ニ在テ疫疾ニ罹リタルヲ証スル者
- 第三 醫員合式ノ証書 是ハ當該軍人死去セシ病院ノ院長軍醫若クハ此患者ノ執ヒタリシ陸軍若クハ市井ノ醫員ノ診斷書ナリ軍醫ノ診斷書ヲ得ヘカラサル時ニハ其地方ノ府縣若クハ陸軍ノ官憲ヨリ遣ハシタル檢官ノ証書ヲ附スヘシ
- 第六十七條 疫癘傳染ニ由テ死没ニ至リシ軍人戰地若クハ公務ノ外ニ於テシ又戰地ニテ之ヲ受タルモ一旦

陸軍武官恩給例

平復ノ後ナルモ此ノ例ニ在ラス

第六十八條 凡テ寡婦ヨリ出願スルニ就テ証據ニ供ス
ヘキ件々ハ當該軍人ノ孤兒第十六條ノ例規ニ準シ其
母ニ代ハル時モ亦異ナルコトナシ

出願ノ地方

第六十九條 寡婦孤兒扶助料ノ願書ハ居住地ノ府縣廳
ヨリ外國ニ在ル者ハ外務省ヨリ北海道ニ在ル者ハ開
拓使ヨリ内務省ニ移シ内務省ヨリ陸軍省ニ照會シ陸
軍省ヨリ當該軍人本屬ノ鎮臺ニ下シ査覈ノ上陸軍卿
ヨ呈シ卿之ヲ正院ニ移ス第七十六條ノ如シ

第七十條 其願書ハ寡婦ノ扶助料ナレハ寡婦ノ主名ニ
テ親族若クハ其郷里ノ戸長二名証人ニ立テ連名タル

ヘシ孤兒ノ扶助料ナレハ後見人一名又ハ親族若クハ
其郷里ノ戸主二名証人ニ立テ連名タルヘシ而シテ區
戸長之ニ與印スヘシ

第七十一條 寡婦扶助料夫ノ傷痰疾病ニ基ツク者ハ第
六十五條若クハ第六十六條ノ証書ノ外夫ノ服役明細
書婚姻届書ト并ニ男女子アレハ其年齡書ヲ副フヘシ
若シ男女子年齡書ニテ其配合ヨリ生レタルコトヲ証
シ戸長ノ與印アレハ婚姻届書ニ及ハス

第七十二條 停年恩給ニ基ツク寡婦ノ扶助料願書ニハ
其夫ノ服役明細書男女子年齡書其夫ニ政府ヨリ給
タル恩給番號登錄寫帖即チ恩給証書ヲ副フヘシ
第七十三條 其遺孤母ナク直チニ父ノ傷痰病ニ基ツク

陸軍武官恩給例

恩給ヲ受ル者ハ婚姻届書ヲ除キ母ノ死去若シハ離縁
ヲ届ケシ証ヲ出スノ外第七十一條ノ例ニ異ナルコト
ナシ其母死去ノ後恩給ヲ繼クノ孤兒ハ恩給番號登錄
寫帖即チ恩給証書ヲ副フヘシ

退職恩給計算

第七十四條 下士兵卒並ニ同等ノ輩退職恩給ヲ獲ルノ
權ヲ得タル者ハ其死役ノ時ニ當リ其恩給許可ノ命下
ルマテ其隊ニ駐マルヘシ然レモ直チニ歸郷ヲ願フ者
ハ亦自在タルヘシ但シ其歸郷ヲ願フ者ハ發程ノ日ヨ
リ除隊スヘシ
右ノ除隊ニ屬シタル者ハ發程ノ日ヨリ陸軍定額内ニ
リハ旅費ノ外一切之ヲ給スルニトナシ

其傷痍疾病ニ基ツキ退職ヲ許ス者ハ其所屬ノ隊ニ止
マリ計算進達ノ日ヲ待ツヘシ

第七十五條

上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂
各部右同等ノ輩服役停年ニ由テ退職ヲ願ヒタル者ハ
其進達帖陸軍卿ノ受領ヲ歷タルノ報ヲ得ルノ後ニア
ラサレハ其所屬ノ隊ヲ離ル、コトヲ得ス然レモ其情
願ナレハ檢閱使直チニ俸給ノ半額ヲ給シテ之ニ六個
月ノ休暇ヲ給フコトヲ得而シテ已ムヲ得サルノ事故
アリテ其鎮臺ノ司令將官並ニ其隊ノ首長之ヲ保証ス
ルモハ更ニニ休暇ノ願ヒヲ許シ猶六個月ノ休暇ヲ給フ
ヲ得ヘシ但シ休暇間ノ日月ハ計算ノ時之ヲ除ク

第七十六條

凡ソ計算ハ陸軍卿之ヲ主任シ合式ノ恩給

計算書ヲ作り之ヲ正院ニ移ス
其傷疾疾病ノ恩給ニ係ル者ハ預メ其証憑書類ト共ニ
陸軍々醫總監ノ會議ニ付シ而シテ後ニ之ヲ計算ス
正院ニテハ計算書ヲ大藏卿ニ移シ點檢ヲ歷テ再ヒ正
院ニ移シ正院ヨリ恩給許可ノ令ヲ内務兩卿ニ移シ其
所轄ヲ歷テ當該人名ニ下サシム

第七十七條 停年恩給ハ之ヲ受ル軍人ノ官階ニ準スル
ヲ例トス然レモ其官階ニ進ミ現役ニ服スル未ダ進給
條例ノ停年最下限ノ半ニ至ラサル前ニ退職ヲ願フ者
ハ前官ニ準シテ之ヲ賜フヲ例トス

第七十八條 凡テ上長官士官准士官下士並ニ同等ノ諸
官其官階ニテ現役ニ服スルコト十二年滿限(上長官士
官准士官并會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ハ非職
ヲモ算ス)ノ者ニハ其官階ニ屬スル恩給五分ノ一ヲ以
テ之ヲ増スコトヲ得

此特別ノ例ニ係ル恩典ハ或ハ停年ニ由リ或ハ傷疾疾
病ニ由リテ表中最上限ノ權ヲ有スル者モ亦是ニ與カ
ルコトヲ得

第七十九條 恩給計算ヲナスニ當リ其軍人前官ニテハ
十二年滿限ニ當リ五分一ノ増加ヲ得ルヲ以テ其増加
ノ額現在ノ官階ニテ算スルヨリモ較上ル者ハ前官ニ
準シテ之ヲ算スルコトヲ得

第八十條 毎年政府會計ノ期ニ於テ從來各種ノ恩給ニ
就テ其年ノ通計ヲ以テ來年ノ多寡ヲ量リ大藏卿ヨリ

陸軍武官恩給例

正院ニ上申シ決議ノ上太政大臣ヨリ大藏陸軍兩卿ニ之ヲ下付ス

第八十一條 凡ソ恩給扶助料受領ノ者ハ内務省ヨリ其居住地ノ府縣廳ヲ歷テ其恩給登錄寫帖即チ恩給証書ヲ受領シ是ニ據テ年々府縣廳ヨリ金圓支給ヲ仰クヲ得其當該人名恩給証書ヲ受領スルノ前ニ陸軍卿ヨリ計算ノ告示ヲ該名ニ下シ其中ニ計算ヲ立ル本則ト之ニ屬スル諸事ヲ告示ス

罷役後恩給

第八十二條 罷役後恩給ハ上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩罷役ニ入ルノ初メ服役實期十五年滿限ノ者ニ非ノハ之ヲ受ルコトヲ得ス

其給額ハ當該上長官士官准士官並ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩官階ニ準スル恩給ノ最下限ノ給額三十分ノ一ヲ以テ服役實期ノ年數ニ乘シテ給ス但シ罷役後恩給ハ從軍年並ニ十二年停年ヲ算スルノ恩給ナシ

第八十三條 罷役後恩給ハ當該軍人ノ生涯ニ止リ變シテ寡孤扶助料トナルコトナシ

第八十四條 軍人疾病不治ノ症ニ因テ罷役ヲ願フ者ハ其願書疾病ノ爲メノ退職願ノ如ク之ヲ扱フヘシ其不治タルヲ証スル爲ニ診斷ヲナス醫官ハ鎮臺司令將官ヨリ之ヲ命ス其診斷不治ト決スル者ハ會計會議ニ付シ爾後ハ第五

陸軍武官恩給例

十三條以下ノ諸條ニ開列スル所ノ方法ニ準スヘシ
第八十五條 其上長官士官准士官并ニ會計軍醫馬醫軍
樂各部右同等ノ輩軍紀ヲ犯シ懲治ノ爲ニ罷役ニ入ル
者恩給ヲ賜フノ例ニ在ラス

恩給ノ支給并ニ請求

第八十六條 恩給ヲ受クルノ始期ハ左ノ如シ

第一 計算ノ告示ノ日ヨリ之ヲ給ス即チ陸軍ノ簿籍
中該名ヲ除クノ日ナリ

第二 計算告示ノ日既ニ休暇ニ在ル上長官士官准士
官并ニ會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩ニハ許可
ノ令下ル日ヨリ之ヲ給ス其隊ヨリ發程シタル何ノ
日ニ在ルヲ論セス

若當該上長官士官准士官并ニ會計軍醫馬醫軍樂各
部右同等ノ輩休暇俸ノ餘金ハ陸軍省へ返納ス

第三 下士以下モ亦前條ニ同シ其休暇俸ハ之ヲ願フ
ノ權利ナシ

第四 當該軍人死去シタルキ家族扶助料ハ其死去ノ
翌日ヨリ給ス

第八十七條 凡テ恩給並ニ扶助料ヲ受クルノ始期ハ陸
軍省ヨリ内務省へ通報シ四季ノ首月毎ニ前三箇月分
共府縣廳ヨリ金額ヲ支給ス

第八十八條 金額ヲ受領スル者ハ當該人名ニテモ代人
ニテモ登録寫帖ノ証書ヲ持參シ支給人披見ノ上其區
戸長ヨリ出セル本人存生ノ証書并ニ金額受領証書ト

引替ニテ之ヲ交付スヘシ但シ外國ニ在留セル其本人
 存生ノ証書ハ日本ノ公使若クハ領事官ヨリ差出スヘ
 シ

第八十九條 若シ金額ヲ受ル當該人名前三个月以來死
 去シタル時ハ支給人戸長ヨリ出セル死去ノ証書ニ對
 シ日割十ト月三ヲ以テ其金額ヲ給シ受領証書ヲ取リ
 其權利消絶ニ屬シテ移轉ナキ者ハ其登錄寫帖ノ証書
 ナ收メ府縣廳ヨリ内務省ニ還付シ而シテ陸軍省ニ報
 告スヘシ

第九十條 其權利未ク消絶セズシテ移轉ニ屬スル者ハ
 登錄寫帖ヲ還ヘシ其寡婦若クハ孤兒扶助料願出ノ証
 トナサシム

第九十一條 恩給番號登錄寫帖ノ証書ハ其裏面ニ四首
 月ノ金額ヲ記シタル者ナリ若シ恩給ヲ受ルノ人其証書
 ナ盜難水火災等ニテ失亡スル時ハ速カニ届ケ出ヘシ
 然ル時ハ猶第二寫帖ヲ受ルコトヲ得ヘシト雖モ第二
 寫帖ナモ失亡スル時ハ最早之ヲ受ルコトヲ得大其恩
 給ハ唯生存ノ証書ノミニ就テ之ヲ給スヘシ

第九十二條 若シ陸軍恩給ヲ受ルノ人其本管即チ証書中
 記載ノ地ナラズシテ他府縣ニ就テ金額ヲ受領セント
 欲スル者ハ此事ニ就テ其府縣廳ヲ歴テ出願スヘシ
 右願書ハ四首月ノ一日ヨリ二箇月前ニ出スヘシ此期
 限ヨリ遅延ニ及ヘハ從前ノ府縣廳ニ就テナラテハ之
 ナ受領スルコトヲ得ス

第九十三條 日本外ノ地ニ寄留ノ許可ヲ願フハ地方官
憲ノ手ヲ歴テ内務卿ニ願フヘシ其願意至當ナレハ内
務卿ノ處決ニ因テ恩給若クハ扶助料一箇年分ノ前借
ヲ許スヘシ

權利ノ消絶

第九十四條 前四條ニ揭示セル所ニ拘ラス恩給并ニ年
々ノ扶助料ハ一箇年ノ間棄置キ請求セサル時ハ大藏
省ノ恩給簿ヨリ之ヲ削リ去リ再ヒ請求スルト雖モ前
時ノ金額ヲ得ルノ權ナシ
又寡婦孤兒等當該軍人ノ死去ノ日ヨリ一箇年ノ間其
事情審カニシテ願出サル者ハ其權利消絶ニ屬ス
計算ノ請求

第九十五條 陸軍恩給ノ計算金額ニ就テ違算ノ虞アリ
ト思フ時ハ初メテ金額ヲ受領セシ日ヨリ三個月以内
ニ之ヲ願出ルヲ得ヘシ但シ萬一租漏ニ屬スル時ハ其
權利消絶スヘシ
右請求ハ地方所管鎮臺司契課ノ手ヲ歴テ陸軍卿ニ願
フヘシ

第九十六條 凡ソ恩給ヲ仰ク者故ラニ年月算スルコト
實ナラス或ハ傷疾疾病ニ托シ或ハ寡孤ナリト偽ハル
等上告實ヲ以テセサル者ハ國成典アリ其發覺該官致
仕ノ前ニ在レハ軍法ニ處シ致仕ノ後ニ在リ若クハ其
他ノ者ニ係レハ常律ニ處スヘシ
陸軍罷役俸并恤金令

陸軍武官恩給例

罷役俸

第一條 凡上長官士官准士官并會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役期年滿十一年ノ者ニ非レハ罷役ニ就クト雖モ絶テ俸給ヲ得ルノ權ナシ

第二條 凡ノ罷役ニ入ル上長官士官准士官并會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩服役期年滿十一年ニ至リ未タ十五年滿限ニ至ラサル者ハ其就役年問ノ半ニ均シキ年問罷役俸ヲ受ルヲ得此罷役俸ハ其官階ニ準スル退職恩給ノ最下限三分ノ二ニ均シトス

第三條 上長官士官准士官并會計軍醫馬醫軍樂各部右同等ノ輩罷役俸ヲ受ルノ權利ハ陸軍卿ノ確定セル計算ニ基ツキ正院ニテ之ヲ覆勘ス其方法凡テ退職恩給ノ例ノ如シ

給ノ例ノ如シ

第四條 計算ノ本則ハ亦陸軍卿ヨリ公券ヲ以テ當該ノ人名ニ知告シ其服役實期ノ委曲并ニ罷役俸ヲ受ル權利ヲ有スルノ月ヲ開示ス此公券ハ支給許可ノ証書ト共ニ當該軍人ノ居住スル地方所管鎮臺ノ司契課ニ下シ司契課ノ官人署名捺印ノ上ニテ府縣駐在曹長ヲ媒シ當該軍人ニ下附ス

第五條 計算請求ノ權并ニ權利停止ノ項ハ恩給令ノ第九十四條并ニ第四條ニ異ナルコトナシ

第六條 罷役俸ノ支給ハ四首月ニ於テ前三个月分該管鎮臺ノ司契課ヨリ府縣駐在曹長ニ移シ當該人名ニ交付シ受領証書ヲ出サシム其受領証書ニハ生存ヲ証ス

陸軍武官恩給例

ル爲ニ戸長ノ與印ヲ受テ出サシム
 第七條 凡ソ罷役俸ヲ受ルモノハ府縣駐在曹長ノ請ニ
 應シ其度毎ニ公券ヲ出シ示スヘシ
 第八條 若當該ノ軍人先期ニ死亡シタル時ハ駐在曹
 長ニテ其金圓ヲ交付セヌ死去ノ月日ヲ審カニシ鎮臺
 司契課ニ報シ日數ニ准シ殘余ノ金圓ヲ受テ之ヲ當該
 軍人ノ嗣子若クハ親族ニ交付シ其公務ヲ取テ司契課
 ニ還付スヘシ
 總テ此手數ヲ省ク爲ニ罷役俸ヲ受ルノ軍人死去ノ度
 毎ニ月日ヲ審カニシ府縣駐在曹長ヲ媒シ當該ノ司契
 課ニ報告スルヲ要ス
 其定期盡ル者ハ最後ノ金額ヲ交受スルノ時公券ヲ還

付テ皆濟ヲ証スヘシ

第九條 罷役俸ヲ受ルノ軍人居住ヲ移シ他ノ管廳ニ
 移住地並ニ其移住ノ月日ヲ審カニスヘシ
 第十條 罷役俸ハ一週年棄置キ請求セサル時ハ之ヲ其
 權利消絶セシモノトシテ司契課ノ簿籍ヨリ其名ヲ除ク

罷役恤金

第十一條 凡ソ下士兵卒並ニ同等ノ輩陸軍ニ奉仕シ疾
 病ヲ受ケ若クハ公務中傷痕ヲ受ケテ罷役ニ入り傷痕
 疾病ヲ受ケタル故ヲ以テ扶助ヲ仰クヲ要スル者服役
 實期滿九年ノ後ナレハ罷役恤金ト名ケタル恩典ニ與

カレコトヲ得此恤金ハ二年ニ分テ月頭ニ支給スルモ
シナリ
第十二條 下士兵卒並同等並服役中受ケタル傷疾
病ニ由テ第一號ノ休暇ヲ與ヘ罷役ニ入リタル者ハ此
給料ヲ願フコトヲ得

第十三條 此恤金ヲ受ル者ハ他ノ職役ニ就クカ又ハ他
ノ營業ヲ爲スカ或ハ本人不行跡若シハ粗暴ノ失錯ヲ
シテ陸軍卿此恤金ヲ停止スルコトヲ得
此故ニ鎮臺ノ將官ハ府縣ノ官憲ニ依頼シ時々報告ヲ
取リ之ヲ陸軍卿ニ呈スルコトヲ得
第十四條 此恤金ハ其實一身ノ口ヲ糊スルヲ目的トス
ルヲ以テ若當該ノ罷役軍人死シテ之ヲ埋葬スルニ其

家費ヲ盡スノ急乏ニ達シ陸軍官憲ノ願ニ依テ陸軍
卿其家族ニ一期六個月分ノ金額ヲ給與スルコトヲ得
第十五條 總テ軍人罷役ニ入り又ハ唯服役ヲ免シヨル
者ハ登時之ヲ願フノ志趣ナシト雖モ後日若シ此恩典
ヲ願ハント欲スル者ノ爲ニ一今年ノ猶豫ヲ假ス其一
且此恩典ヲ受ケタル後再ヒ之ヲ願ハント欲スル者モ
同シク此猶豫ヲ假スヘシ

第十六條 此恩典ヲ請フノ進達書ハ其人ニ就テ其隊ノ
長官之ヲ作り其内ニ必ス當該軍人退居セント欲スル
地名ヲ開列スヘシ而シテ之ニ副フヘキ書類左ノ如シ
第一 軍醫診斷証書 是第一診斷並ニ覆覈診斷ヲ兼
ル者ニシテ其傷疾疾病ノ罷役ニ至ラシノタル景況

陸軍武官恩給例

ヲ精確仔細ニ記述スル者ナリ

第二 其傷痕疾病ノ原因証 是病因ヲ詳カニスル者ニシテ若其病因明確ニ証スヘカヲサレ時ハ其軍人發病ノ時ノ景況ヲ叙シ病症ニ就テ臆斷ノ原因ヲ書スヘシ

第三 其軍人ノ服役人相ノ記載書並身元明細書ヲ添フヘシ

第十七條 當該軍人ハ該隊中ニ在テ進達ニ就テハ處決ノ來ルヲ待ツヘシ但シ直ニ歸郷ヲ願フ者ハ其意ニ任ス

第十八條 其隊ノ長官ハ之ヲ鎮臺ノ司令將官ニ呈ス可

令將官ハ之ヲ陸軍卿ニ移シ卿又ハ之ヲ陸軍々醫總監ノ會議ニ付シテ其覆檢ヲ歷ルノ後陸軍卿其年々ノ金額ト之ヲ受ルノ始期トヲ定ム

第十九條 凡シ此恩典ヲ受タル軍人ハ其姓名ヲ書シタル券狀ヲ受シ是ハ唯二個年間ノ價直ヲ有スル者ニシテ之ヲ陸軍省ニ在ル恩金本帳ニ登錄シタル番號ヲ附ス

第二十條 其軍人此券狀ヲ受ケテ罷役ニ入りタル時ハ直ニ軍隊ノ簿籍ヨリ其名ヲ除キ其居住ノ地ヘ向ケ發程セシム其郷里ニ至ルニ及ヒ自ラ此券狀ト並ニ罷役休暇ヲ受ケタルコトヲ其管廳並區戸長ニ報スヘシ

諸種ノ處置

第二十一條 恩金受領ノ始期ハ其券狀ヲ受ケタル日ヨ

陸軍武官恩給例

リ始ムルヲ例トス然レモ其隊中若クハ陸軍病院ニ在
テ發程遲延ニ及ビタル日數ハ之ヲ申告シテ陸軍卿ノ
處決ニ任スヘシ

第二十二條 其支給受領証書ノ方法ハ第六條以下ニ揭
示シタル罷役給ニ異ナルコトナシ唯當該軍人死去シ
タルキハ券狀ヲ府縣駐在曹長ニ還付スルノ外計算還
納ヲ要スルコトナシ

第二十三條 其居住ヲ移ス者ハ亦第九條ノ方法ニ準ス
若其手續ヲ歷スシテ移住スル者ニハ再ヒ給與スルコ
トナシ

第三十四條 二個年恩金ヲ受ケタル後ハ再ヒ後二個年
ノ恩金ヲ給セス然レモ之カ爲ニ例年春秋兩度其管ノ

鎮守ニシテ特別ノ委員ヲ派出シテ當該ノ軍人ヲ覆檢セ
ルコトヲ以テ此委員額本ノ本復ニ至ラザルヲ証明

スル時ハ更ニ二個年ノ恩金券狀ヲ受ケルコトヲ得
第二十五條 右委員巡廻ノ節其診斷ヲ受ケタル者ハ恩
金ヲ停止スヘシ

此委員診斷ノ節本復ニ趨クヲ以一旦券狀ヲ繳納スト
雖モ其後疾病再發スルコトハ更ニ之ヲ願フコトヲ得ヘ
シ

其再發委員巡廻ノ前ナルキハ巡廻ヲ待テ之ヲ願ヒ若
其期遠キキハ府縣駐在曹長ニ就テ其査覈ヲ受テ之ヲ
願ヒ猶事宜ヲ得ナル者ハ管廳ノ証書醫員ノ証書ヲ以
テ之ヲ願フコトヲ得ヘシ

陸軍武官恩給例

第二十六條 營後ノ軍人其傷痍疾病重症ニ趣キ恩給ヲ
 給スル時ニ係ル者ハ更ニ恩給ヲ賜フ員ノ請付キ以
 罷役恩金ノ券狀ニテ受領シタル金額ニ恩給受領シ日
 返納スルハ得ルニシテ其返納ノ期ハ恩給受領シ日
 廢疾ハニ就テ特別ノ處置

第二十七條 凡テ軍人服役中ノ疾病(公務ノ故ニ)ニ由テ
 一肢以上ノ切斷ヲ受ケ受クハ兩目ヲ盲スト雖モ恩給
 ヲ受ルノ權利ナキ者ハ服役實期滿九年ニ至ラスト雖
 モ四季ノ扶助金ヲ給スルコトアリ
 其願書進達ハ上ニ揭示スル如ク証書ヲ副フヘシ如此
 キ軍人ニ隊中ニ在リテ恩金ノ券狀ヲ待タズ直ニ該隊
 ノ簿籍中ヲ除キ其郷里ニ向テテ發程セシムルニシテ

其郷里ニ於テ之ニ請可セル特別扶助金ノ第一額ニ支
 給スル爲メ下命ノ寫帖ヲ受クニシテ中ニ
 將官退職令

第一條 凡テ將官ハ多年經久ノ疾病ニ因テ非職ニモ辭
 スル者ニ非レハ退職ヲ命ズルコトナシ
 第二條 然レモ中將少將并ニ會計監督長軍醫總監ハ年
 齡ニ因テ後備軍ノ驅員ニ轉スヘシ

第三條 其年齡ハ中將ハ六十二少將并ニ其相當ノ官ハ
 六十ヲ以テ定限トス
 第四條 凡テ後備軍ノ驅員ニ備ハル將官ハ戰時國內ノ司
 命ニ非レハ現役ニ服スルコトナシ
 第五條 首師若シテ偏裨ノ司令ニ任シ曾テ戰地ニ臨シ

將官ハ後備軍ノ職員ニ備ハル例ニテラスト雖モ其年齢六十五ニ至レハ亦是ニ轉テ但元老院議官ニ列シ或ハ他ノ兼官ニ任スル者ハ此限ニテラス

第六條 凡ソ將官後備軍ノ職員ニ轉スルコ當リ退職ヲ請フ者ハ恩給ヲ賜フテ之ヲ許ス

陸軍恩給令附錄

第一條 陸軍々人恩給ヲ受ルノ權理ハ本令ニ掲載スルノ外コレナシト雖モ戰死或ハ公務ニ因テ死亡スル者ノ父母或ハ幼少ノ弟妹ニ在テ之ヲ發育スル親戚モテ上恩給令第六十九條ノ順序ヲ經テ申告スルコアラハ其次第稱ニ因リ臨時ノ詮議ヲ以相當ノ扶助料ヲ給ス

但寡婦孤兒ノ内ニ扶助料ヲ受ルモノアルハ別ニ之ヲ給スルコナシ

第二條 軍屬ハ恩給ヲ受ルノ權理ナシト雖モ戰地或ハ公務ニ因テ傷病ヲ受ケ又ハ死亡スルモハ其原由ニ因リ臨時ノ詮議ヲ以テ相當ノ扶助料ヲ給スルコアルヘシ

第三條 軍人停年未滿ニシテ恩給并罷役俸罷役恤金ヲ受ケサル者ハ當分従前ノ如ク文官一般ノ滿年賜金ヲ給ス但罷役俸罷役恤金ヲ受ルモノト雖モ滿年賜金ト比較シ其金高ノ多キ方ニ就テ給スヘシ

第四條 恩給并罷役俸罷役恤金ヲ受ルモノト雖モ其

軍人ノ籍ヲ列セサルノ前文官ニ奉仕スル者ハ其年數
 應シ滿年賜金ニ別々ニ給スルニシテ
 第五條 本令發行ノ日ヨリ傷痕扶助及ヒ死亡ノ者祭資
 家族扶助概則ハ廢止ニ屬スト雖モ履行以前傷痕死亡
 ニ因リ既ニ扶助ヲ受ルモノハ從前ノ規則ニ從フニシ

(參考) 明治十一年一月十四日陸軍省甲第一號ヲ以府縣ニ達

昨十年鹿兒島賊徒征討之際戰死致候軍人ノ寡婦
 孤兒扶助之儀陸軍恩給令條款ニ掲載之手續ヲ以
 テ早ク出願候様其遺族ニ相達於其應恩給令及右
 書式ニ對照ニ調査之上無遲滯其筋ニ可差出此旨
 相達候事

但戰死ノ本人寡婦孤兒無之者并當省出仕文官
 恩給令附録ニ適當ナル者ハ本文ニ準シ
 申告可致且其他ノ軍人出征中傳染病ニ罹リ或
 ハ公務ノ故ヲ以テ死亡スル者ノ寡婦孤兒恩給
 令ニ據リ扶助ヲ可願者モ同様取計可差出事

(參考) 明治十一年一月十七日陸軍省甲第三號達

昨十年賊徒征討之役并九年十月熊本縣下騷擾之
 際戰死或ハ傷痕ニ源因シ竟ニ死ニ至ル軍人軍屬
 之寡婦孤兒ニ恩給令ニ因リ扶助料下賜候迄手當
 金ノ儀ハ十年大坂陸軍事務所丁第四百十九號達
 ニ照準ニ總テ本籍府縣ニ於テ一時立替下渡置追

陸軍武官恩給例

テ扶助料下賜候節差引相立可申此旨相違候事
但本文手當金は迄近衛局鎮臺等ニ於テ下渡有
之分ハ其旨同局臺等ヨリ本人本籍府縣ニ照會
可致候條追テ扶助料下賜候節該府縣ニ於テ差
引相立可致返戻事

(參考) 明治十一年一月十九日東京府乙第三號ヲ以區戶長ニ達

昨十年鹿兒島賊徒征討之際戰死致候軍人之寡婦
孤兒ニ扶助料下賜候ニ付而者恩給令條款ニ掲載
ノ手續ヲ以テ右書式ニ照準可願出旨陸軍省ヨリ
達有之候條右相當之者ニ早々當廳ニ出願候條其
遺族ニ無波可及告示此旨相違候事

但戰死者ノ内寡婦孤兒無之者并陸軍出仕ノ文
官ニシテ恩給令附録ニ適當スル者其他軍人出
軍中傳染病ニ罹リ或ハ公務上死亡セシ者ノ寡
婦孤兒ニシテ恩給令ニ據リ扶助ヲ可願者モ本
文之通可相心得事

(參考) 明治十一年五月十六日東京府ヨリ區戶長ニ達

陸軍恩給令諸書式附録中別紙之通改正及ヒ正誤
候旨同省ヨリ達越候條此旨相違候事

恩給証書類第一式

表當年額ヲ分テ四季ノ首月毎ニ支給

其金額左ノ如シ

(朱) 明治何年何月 金何圓何拾錢

同 年何月 金何圓何拾錢宛

同何年ヨリ 七十月 金何圓何拾錢宛

(朱) 妻

恩給証書類第二式

(朱) 令第一條第二條并ニ第三節〇
令第七十三條末款

大政官	陸軍恩給登錄寫帖
(朱) 番 壹八九七	(朱) 甲 本夫死去 ニ付一五 三四ヨリ 本號ニ更 (乙) 何府管下何國何郡何町村 士族 何縣何兵第何聯隊長 陸軍大佐故何某婦 某 右夫明治三十六年四月 三日死去

陸軍武官恩給例

(朱) 寡婦ナク孤

父某死去ニ

(朱) 乙

陸軍大佐故

何某長男

右父何年何

月何日死去

(朱) 寡婦死シテ

孤兒ナラハ

母某ノ寡婦

死去ニ付

停年(傷痕)

恩給年額 貳百圓

右明治九年十月二十三日欽定陸軍恩給

令ニ基キ願ニ依テ許可ノ上之ヲ此簿册

ニ登錄ス

明治三十六年五月五日

大政大臣某印

此恩給ハ本人終身之ヲ給ス本人死去或ハ再婚等ノ後遺兒例規ニ準シ此金額ヲ受ルコトヲ得ヘシ

(朱) 以下前式ニ同シ

乙(朱) 陸軍大佐故 何某長男 何某 右母何年何月何日死去
甲(朱) 長男丁年ニ至リ次子ナラハ
及ニ付 陸軍大佐故 何某次男 何某 當何年何月何日死去
本人兄何月何日死去

(朱) 前式ニ同シ

○(朱) 定限ニ及 孤兒ナラハ 此恩給ハ本 人二十歳迄 之ヲ給ス本 人二十歳迄 満レハ其弟 妹例規ニ準 シ此金額ヲ 受ルコトヲ 得ヘシ

(朱) 裏面書式同シ

(参考) 明治十一年七月三十日陸軍省甲第十號ヲ以テ陸軍各局各官廨及府縣ニ達 陸軍恩給令諸書式中別紙ノ通加除並正誤候條此 旨相達候事 恩給令諸書式加除並正誤

陸軍武官恩給例

- 一 恩給令諸書式恩給願書第五式ノ欄外令第十四條ノ上ニ令第十三條ノ文字ヲ加フ
- 一 同第五式第六式第七式第八式ノ欄外(第三式添書式ニ準シ添書ヲ作クルヘシ)ノ文字ヲ刪除ス
- 一 同副書類第一式ノ欄外(令第七十一條ニ係ル明細書ハ各自ノ軍隊手帖或ハ私記ニ因テ書載シ第何聯隊日記ノ文字ヲ除クヘシ)ト朱字ニテ加フ
- 一 同醫家診斷書類第一式第十式(診斷書)ヲ(診斷証書)ニ改ム
- 一 同陸軍官憲証書類第三式ノ欄外陸軍官憲ナキ者ハ(何府縣)何官何某(印)ノ文字ヲ加ヘ何(府縣)何大區何小區ノ肩ニ(府縣)ハ數里ノ距離ニシテ官員出張差支ルキハ)ト朱字ニテ加フ
- 一 同市井官憲証書類第一式ニ(令第七十三條)ハ(令第七十一條)ノ誤
- 一 同進達書類第三式裏面實期區畫中服役從軍七個年ノ次(二十分増加)ヲ(増員乘率)ト改ム

明治九年十一月廿一日太政官第百十號ヲ以院省使廳府縣へ達

海軍禮砲條例別冊ノ通被定候條此旨相達候事

海軍禮砲條例

第一條

天皇陛下へノ禮砲ノ數ハ廿一發ニシテ之ヲ皇禮砲ト

第二條

天皇陛下禮砲ヲ爲スヘキ堡砦或ハ砲臺有ル地ニ着御發御ノ時ハ此堡砦砲臺及ヒ其港內在泊ノ諸軍艦ヨリ齊シク皇禮砲ヲ發ス可シ

第三條

軍艦ニ臨御ノ時ハ其港在泊ノ諸軍艦ヨリ於テ滿艦節ヲ

爲スヘシ御艇本艦ニ接近スルハ其艦ニ於テハ水夫
 長士員舷側ニ在テ同音ノ號笛ヲ吹キ二員ノ士官或ハ
 士官補艦梯上下兩側ニ立テ奉迎シ海軍將官又ハ指揮
 官及ヒ艦長ハ梯邊ニ奉迎シ其他ノ諸士官ハ官等ニ從
 テ後艦甲板上艦梯ノ側舷ニ整列シ樂隊ハ其對舷ニ整
 列シ水兵ハ諸桁上ニ整列ス其他ノ諸員ハ前舷ニ整列
 ス此時副長ノ祝聲ニ應シテ桁上ノ水夫一同祝聲ヲ發
 スルコト總テ三回ス又本艦ニ連接セル諸艦船ニ於テモ
 齊シク水夫ヲ諸桁上ニ整列セシメ本艦ト同シク祝聲
 ヲ發スヘシ

第四條 上 艦内ニ乘御シ時ハ御旗ヲ大橋頂ニ海軍旗ヲ前橋頂ニ

國旗ヲ後橋頂ニ掲ク但シ此時本艦ニ將旗ヲ掲ケアル
 船ニテハ下ニ若シ此三旗ヲ掲クハキ三橋ヲ有セサル艦
 船ニテハ支檣或ハ旗竿ヲ設立シ此旗ヲ掲ク諸士官以
 テ敬禮シ水夫ハ捧銃シ樂隊ハ奏樂シ同時ニ皇禮砲ヲ
 發ス諸軍艦ニ於テモ亦本艦ノ禮砲第二發目ヨリ齊シ
 ク皇禮砲ヲ發シ最後ノ放發ニテ諸艦船桁上ノ水夫皆
 甲板上下ル可シ但シ御艇ニハ唯御旗及ヒ國旗ヲ掲
 出スルコトヲ禁ズ

第五條 軍艦ニ乘御シ航行ケル時ハ滿艦飾ヲ總テ除キ唯本艦
 ニ於テ御旗海軍旗及ヒ後橋ニ國旗ヲ掲ク然シテ航行
 中ニハ唯御旗ノミヲ掲クルコトアルヘシ

第六條

還幸ノ時モ其禮式前ニ同シ但シ艦梯通行ノ時水夫ヲ
 桁上ニ列立シ御艇ニ乗御アラハ三回祝聲ヲ發セシム
 御艇ニ御旗ヲ掲クルキハ本艦ノ御旗ヲ國旗ト交換シ
 御艇本艦ヲ離ルハ後皇禮砲ヲ發ス其他ノ諸軍艦ニ
 於テモ同ク水夫ヲ桁上ニ列立シ三回祝聲ヲ發セシム
 本艦ノ禮砲第二發目ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發ス可シ
 第九條
 諸艦船ノ近傍ヲ通御ノキハ其艦船ニ於テ艦長副長當
 值士官及ヒ暗號手ハ遠望臺ニ諸士官ハ後艦ニ整列シ
 敬禮ヲナシ樂隊ハ奏樂シ水兵ハ桁上ニ列立シ三
 回祝聲ヲ發ス可シ

第八條

乘御ノ端艇ニ大副長(少佐或ハ中尉)大尉(大尉)六員指揮
 司少尉指揮ヲ管掌ス其敬禮法ハ艦船上ニテハ前數
 條ノ如クト雖モ諸端艇ニ於テハ楫ヲ建テ總員脱帽直
 立スルニ止ル

第九條

航御ノ時其艦船御旗海軍旗及ヒ國旗ヲ掲揚スル時ハ
 之ニ違フ所ノ諸軍艦ハ必ス皇禮砲ヲ發ス可シ又其禮
 砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺ハ近傍ヲ通御ノ時ハ該堡砦砲
 臺及ヒ同所ニ在泊ノ軍艦ヨリ齊ク皇禮砲ヲ發ス可シ

第十條

乘御ノ艦船在泊セザル港内ニ來着セル諸軍艦及ヒ御旗

飛擲者其飛擲海岸附近傍有航行者諸軍艦必ス皇禮砲ヲ發ス可シ

第十三條 皇族の御艦若クハ海軍旗國旗ヲ掲ケテ唯御旗ノミヲ掲ケルモ空諸軍艦及ヒ堡砦砲臺ニハ皇禮砲ヲ發セラルベシ但シ軍艦ハ臨時發砲スル事アルヲ示シ得ベシ

第十四條 天上帝皇太皇太后皇太后皇后皇太子及ヒ皇太子妃皇子皇女ニハ同一ノ敬禮ヲ爲シ皇禮砲ヲ發ス可シ但シ天上帝皇太皇太后皇后皇太子及ヒ皇太子妃ニハ御旗ヲ用ヒ皇子皇女及ヒ親王ニハ皇族旗ヲ用フ可シ

第十三條 皇族の御艦若クハ海軍旗國旗ヲ掲ケテ唯御旗ノミヲ掲ケルモ空諸軍艦及ヒ堡砦砲臺ニハ皇禮砲ヲ發セラルベシ但シ軍艦ハ臨時發砲スル事アルヲ示シ得ベシ

第十四條 皇族の御艦若クハ海軍旗國旗ヲ掲ケテ唯御旗ノミヲ掲ケルモ空諸軍艦及ヒ堡砦砲臺ニハ皇禮砲ヲ發セラルベシ但シ軍艦ハ臨時發砲スル事アルヲ示シ得ベシ

但外國艦船下之關係ハ此限ニテラズ
第十六條 外國艦船ヨリ皇禮砲ヲ受ケルハ我カ先任官

御艦外一艦ヨリ答砲ス可シ若シ他ニ軍艦ナキハ御
艦ヨリ答砲ス可シ雖ハ其御艦軍艦ニ非レハ答砲セ
又内外國ノ艦船同時ニ皇禮砲ヲ發スルハ之ニ答
砲スル事ナシ

第十七條 左ニ記載セル祝日ニハ諸艦總テ滿艦飾ヲ爲シ各軍艦
及ヒ堡砦砲臺ヨリ正午ニ皇禮砲ヲ發ス可シ
記元節 天長節

第十八條

左ニ記載セル祭日祝日ニハ諸艦船總テ艦飾ヲ爲ス可
以 孝明天皇例祭

第十九條

外國ノ皇帝或ハ太子及ヒ其后妃又ハ大統領我カ領内
禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺有ル地ニ到着シ又此地ヨリ
退歸スルアラハ其到着ト退歸ノ時トニ於テ其堡砦
砲臺ヨリ皇禮砲ヲ發シ又同所碇泊ノ諸軍艦ニテ其國
旗ヲ大橋頂ニ掲ケ滿艦飾ヲ爲ス可シ其他總テ我カ
天皇陛下ニ於ケル式ト同一ナリトシ又内外國ノ港内

第三條 我カ軍艦ニ來乘及ヒ退艦ノ時於テモ其
敬禮ノ式同一ナルニシテ但シ大橋頂ニ其固有ノ旌旗ヲ
掲シ可シ

第二條 外國ノ皇族我カ港灣ニ來着シ或ハ内外港内ニ於テ我
カ軍艦ニ來乘スルキハ其艦ノ大橋頂ニ其固有ノ旌旗
ヲ掲シ其他ハ總テ我カ皇族ニ於ケル敬禮ノ式ト同一
ナル可シ

第二十一條 我カ軍艦内國ノ諸港ニ在テ同港在泊ノ外國軍艦ノ其
本國ニ於ケル祭禮日或ハ外國ノ諸港ニ在泊シ該國ノ
祭禮日及同港ニ在ル他ノ外國軍艦ノ其本國ニ於ケル

祭禮日等ニ會スルノ時其外國ノ軍艦ニテ滿艦飾或ハ
艦飾ヲ爲シ禮砲ヲ發シ又ハ鑼鼓砲臺ニ於テ禮砲ヲ發
スル等彼ノ告知アラハ我カ各軍艦ニテモ亦彼ノ
ト同時ニ同様ノ艦飾ヲ爲シ禮砲ヲ發ス可シ其砲數ハ
二十一發ヲ起ニ可カラサルモトス
但此禮砲ニハ其答砲ヲ要セス
第二十條 太政大臣左右大臣及ヒ特命全權辦理大臣各公使領事
ハ禮砲ハ各官職ニ從テ其砲數ヲ定ムル左ノ如シ
太政大臣左右大臣 十九發
特命全權辦理大臣 同
特命全權公使 十五發

辦理公使

十三發

代理公使

十一發

總領事

九發

領事

七發

第廿三條

大政大臣左右大臣公務ヲ帶ヒ出行スルニ當リ特旨ノ命アルニ於テハ其港出發及ヒ歸着ノ時堡砦砲臺又ハ港內在泊先任官乗組ノ禮砲ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス但シ同港ニ在泊セル數艘ノ軍艦ニ同日來乗スルハ唯先任官乗組少一艦ヨリ禮砲ヲ發スルノミ又軍艦ニ乗組航行スルハ最初乗艦最後退艦ノ際トニ於テ相當ノ禮砲ヲ發スヘシ

第廿四條

大政大臣左右大臣公務ヲ帶ヒテ乗組シ軍艦或ハ軍艦ニ非サル諸船舶ニ於テ其乗艦ヲ表スルカ爲メ大楯頂ニ國旗ヲ掲ク事アルハ海上ニテ之ニ逢フ軍艦及ヒ其發着ノ港内ニ在泊セル先任官乗組ノ軍艦ハ必ス相當ノ禮砲ヲ發スヘシ

第廿五條

大政官左右大臣ニ對シ外國ノ軍艦ヨリ禮砲ヲ發スル時ハ同數ヲ以之ニ答ス其我軍艦ヘノ答砲ハ其官職相當ナル砲數ヲ以テス但シ指揮官ニ非サル大佐以下ノ艦長ハハ七發ヲ以答砲スヘシ

第廿六條

特命全權辦理大臣公務ヲ帶ヒ我カ領内禮砲ヲ爲ス可
キ堡砦砲臺有ル地ニ着發スルハ相當ノ禮砲ヲ發ス
若シ軍艦ニ乗組ニ航行スルハ最後退艦ノ際亦相當
ノ禮砲ヲ發ス

但シ此例ハ外國ノ港内ニ於テモ通用スルモノトス

第廿七條

特命全權公使ノ禮砲ハ唯其駐節國ノ領内諸港ニ於
テノニ發スルモノトス故ニ若シ軍艦ニ乗組ニ差遣セ
ラルル國ニ航行スル時ニ其港内ニ到着上陸ノ時ニ非
ハシ其軍艦ヨリ禮砲ヲ發セザル可ク

第廿八條

特命全權公使公務ヲ帶ヒ其駐節國ノ領内諸港ニ在泊
セル我カ軍艦ニ來乘スルハ其退艦ノ際相當ノ禮砲
ヲ發ス又領内ノ一港内ニ於テ同日我カ數艦ニ來乘スル
時其内ノ一艦ノニ禮砲ヲ發ス且數回同艦ニ來乘ス
ル禮砲ヲ發スルハ十二个月ニ唯一回ナリトス其歸朝
迎接ノ命ヲ受ケタル軍艦ニ乗組マハ其乘艦ノ際ノニ
相當ノ禮砲ヲ發ス可ク

第廿九條

辦理公使及ビ代理公使ノ禮砲モ亦前二條規則ニ同
シ
第三十條
總領事及ビ領事公務ヲ帶ヒ我カ軍艦ニ來乘スルハ

其過艦之際禮砲ヲ發ス又敵艦ノ軍艦ニ同日來
乘スルニ第廿八條ノ例ニ準ス
但シ此禮砲ハ其駐節セル外國港内ニ於テノ發ス
ル砲ニテハ其發スルニ對シテ其發スルニ對シテ其發スルニ對シテ

第卅一條

外國ノ大使及諸公使領事ニハ前數條ノ規則ニ準シ
堡砦砲臺或ハ軍艦ニハ相當ノ禮砲ヲ發ス可キ

第卅二條

陸軍卿及ハ海軍卿ニハ禮砲ハ其砲數ヲ定メ事左ノ如
ク陸軍卿ニハ陸軍卿ノ禮砲ハ其砲數ヲ定メ事左ノ如
ク海軍卿ニハ海軍卿ノ禮砲ハ其砲數ヲ定メ事左ノ如

第卅三條

陸軍卿及ハ海軍卿公務ヲ帶ヒ禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲
臺アル地ニ到着セルキハ其堡砦砲臺ヨリ相當ノ禮砲
ヲ發ス又軍艦ニ來乘スルキハ發艦ノ時其軍艦ヨリ禮
砲ヲ發ス若シ同港ニ於テ同日數艘ノ軍艦ニ來乘スル
キハ退艦ノ際唯一艦ノ禮砲ヲ發ス其軍艦ニ乘組ニ
航行スルキハ其乘艦退艦ノ際ニ於テ其軍艦ヨリ禮砲
ヲ發ス可キ

第卅四條

海軍卿公務ヲ帶ヒテ乘艦シ大櫓頂ニ海軍旗ヲ掲グル
ルキ其港ニ來着ル軍艦ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス且軍艦
海上ニ於テ此旗ヲ掲グ發艦ニ相違ラズ其禮節同シ又

同艦我カ領内ニ港灣ニ到着スル時港内ニ軍艦數艘在泊セシ其内先在官乗組ニ一艦ヨリ禮砲ヲ發ス可シ

- 第卅五條 陸軍大將ハ其儀禮ニ從テ大將ヨリ禮砲ヲ發ス可シ
- 陸軍大將ハ其儀禮ニ從テ十五發
- 海軍大將ハ其儀禮ニ從テ同
- 陸軍中將ハ其儀禮ニ從テ十三發
- 海軍中將ハ其儀禮ニ從テ同
- 陸軍少將ハ其儀禮ニ從テ十一發
- 海軍少將ハ其儀禮ニ從テ同
- 陸軍大佐ハ其儀禮ニ從テ九發
- 少將ノ代理

海軍大佐 艦隊指揮官 以下 答砲 此將官及ヒ大佐海軍管轄場ノ指揮長官或ハ陸軍鎮臺ノ司令長官ヲ勤務スル時ハ本官相當ノ砲數ニ二發ヲ增加ス可シ

第卅六條

鎮守府ノ司令長官或ハ艦隊又ハ艦船ノ指揮長タル將官及ヒ大佐禮砲ヲ爲ス可キ堡砦砲臺アル地ニ到着シ初テ上陸スル時ハ其堡砦砲臺ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス又鎮臺或ハ軍隊ノ指揮官タル陸軍將官及ヒ大佐公務ヲ帶ヒ軍艦ニ來乗セハ退艦ノ際其軍艦ヨリ相當ノ禮砲ヲ發ス然レモ此陸軍將佐同日同港ニ於テ數艘ノ軍

陸軍禮砲條例

艦ニ來乗スル時ハ唯其内ノ一艦ノミ禮砲ヲ發ス

第卅七條

前條ノ禮砲陸海軍ノ別ナシ將佐官ニ對シ外國ニ於テハ十二个月間ニ一回本國ニ於テハ三年間ニ一回トス若シ十二个月間ハ三年ニ滿タスシテ其將佐ノ官等昇進スル時ハ其年月以内ト雖モ昇進ノ官等ニ從テ其禮砲ヲ發ス

但シ此禮砲ニハ其答砲スルコトナシ

第卅八條

海軍將官及ヒ大佐艦隊或ハ艦船ノ指揮官トナリ初メテ其艦ニ將旗或ハ代將旗ヲ相當ノ檣頂ニ掲ケ又ハ官等ノ昇進ニ因テ其旗旒ヲ換揚シ或ハ其職ヲ罷メ其旗

旒ヲ下スル該指揮官其港内ニ於テノ先任官タル時ハ之ニ亞シノ先任官乗組ニ一艦ヨリノ之ニ相當ノ禮砲ヲ發ス若シ其港内ニ於テ該指揮官ヨリ上級官乗組ノ軍艦アル時ハ之ニ對シ該指揮官ノ乗艦ヨリ先ツ相當禮砲ヲ發ス然レモ他ニ禮砲ヲ發スヘキ艦ナキ時ハ該指揮官乗組ニ一艦獨リ禮砲ヲ發ス可キモノトス但該官在職中他ノ事故ニ依テ其旗旒ヲ揚ケ又ハ下スコトアル時其禮砲ハ十二个月間ニ唯一回ニ限ルヘシ

第卅九條

將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐初メテ先任官ニ會合スル時ハ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

但シ艦隊指揮官タル大佐指揮官ニ非サル先任大佐

ニ相送フ時ハ此例ニアラス

第四十條

將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐各自艦隊ヲ率キテ會合スルキハ唯各艦隊ノ先任將官又ハ指揮官タル先任大佐ノ一艦ヨリ此諸艦隊中最上官タル將官或ハ艦隊指揮官タル大佐ニ對シテノニ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

第四十一條

凡ソ軍艦初メテ將官或ハ艦隊指揮官タル大佐ニ會合スル時其將官或ハ大佐先任官タルニ於テハ之ニ對シ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ若シ二艘以上ノ軍艦同時ニ將官或ハ艦隊指揮官タル大佐ニ會合スルキ供ニ該官ノ所屬ナルキハ其内先任官乘組ニ一艦ノニ相當ノ禮

海軍	禮	砲	數	表			
天皇	天上天皇	大皇太后	皇太后	皇太子	皇子	女親王	二十發
大政大臣	左大臣	右大臣	特命全權	辨理大臣	大皇太后	皇太后	十九發
陸軍卿	陸軍卿	海軍卿	特命全權	公使	大皇太后	皇太后	十五發
中將	中將	辨理公使	辨理公使	中將	皇太子	皇子	十三發
少將	少將	代理公使	代理公使	少將	皇太子	皇子	十一發
大佐艦隊	大佐艦隊	指揮	陸軍少將	總領事	皇太子	皇子	九發
艦長	艦長	砲	領事	領事	皇太子	皇子	七發
商船	商船	砲	七發	七發	皇太子	皇子	五發

大將以下一軍或ハ一艦隊ヲ指揮スル陸海司令長官ハ定數ニ二發ヲ増ス皇族陸海軍ノ官格ヲ以テ乘艦スル者ハ其官相當ノ數ヲ以テ

砲ヲ發ス

但シ各自其所轄ヲ異ニスルモ各自ニ禮砲ヲ發ス可ク

第四十二條

後任ノ將官又ハ艦隊指揮官タル大佐ヨリ海軍旗或ハ將旗又ハ代將旗ヲ掲ケタル艦ニ對シ禮砲ヲ發シタル時ハ該艦ヨリ此將官又ハ大佐ハ其官職相當ノ砲數ヲ以テ答砲ス可ク然レモ其禮砲ヲ發シタル士官艦隊指揮官ニ非サルハ大佐以下ナルモ七發ノ數ヲ以テ之ニ答砲スヘシ

第四十三條

將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐又ハ艦長タル佐尉官ニ

員以上ヨリ海軍旗或ハ將旗又ハ代將旗ヲ掲ケタル艦ニ對シ禮砲ヲ發シタルハ受ケタル其砲數ヲ以テ該艦ヨリ唯一回答砲ス可シ假令其在職中數回ノ會合ヲナスト雖モ其禮砲ヲ發スルト唯一回トス但シ官等昇進ニ由テ將旗或ハ代將旗ヲ換揚セルハ此例ニ在ラズ

第四十四條

艦長タル大中少佐及ヒ大中尉又ハ其他ノ士官ハ海軍ノ艦隊指揮官タル大佐或ハ陸軍少將ノ代理タル大佐ヨリ下等ノ士官ニ對シテハ外國何レノ地方ニ於テモ禮砲ヲ發スル事ナシ

第四十五條

將官及ヒ艦隊指揮官タル大佐又ハ艦長ニ對シ内國或ハ外國ノ商船ヨリ禮砲ヲ發シタルハ一艘ノ商船ハ五發數艘ノ商船ハ七發ヲ以テ答砲ス可シ但シ他官省所轄ノ船舶モ之ニ準ス

第四十六條

外國ノ貴官及陸海軍省ノ長官或ハ將官又ハ指揮官タル大佐等ニ發スル禮砲ハ總テ我國ノ定制ニ照準ス若シ其諸官ト同官職タル我カ貴官及ヒ陸海ノ長官或ハ將官ニ對シ外國ノ軍艦ヨリ發シタル禮砲我國ノ定制ヨリ多數ナルハ其外國ノ諸官ニ對シテモ亦同數ノ禮砲ヲ發ス可シト雖モ其數十九發ヲ超ヘサルモノトス

但シ此禮砲ニハ必スシモ其答砲有ルモノト期スヘ
カラス

第四十七條

外國軍艦ノ艦長タル大中佐我カ軍艦ニ公問スル時若
シ嘗テ我カ軍艦ノ艦長タル大中佐其外國ノ軍艦ニ公
問セシ時此軍艦ヨリ禮砲ヲ發シタル事アルニ於テハ
其外國軍艦ノ艦長タル大中佐ヘ對シテモ同數ノ禮砲
ヲ發ス可シ

第四十八條

我カ軍艦締約國ノ港内ニ到着スル時ハ其國ニ對シニ
十一發ノ禮砲ヲ發ス可シ
但シ締約ニ非サル國ニ於テハ先ツ港内ニテ彼ノ

軍艦或ハ其地方官ニ禮砲ノ交換ヲナス可キヤ否ヤ
ヲ照會シ其回答ノ旨ニ應ス可シ但シ十二个月ヲ經
テ再ヒ同港ニ到着スル時モ亦同一ナリトス然レモ
若シ我カ先任官乗組ニノ軍艦既ニ其港内ニ在泊セ
バ其令ヲ受ク可シ

第四十九條

外國ノ軍艦我カ領内ノ港灣ニ到着シ我カ國ニ對シニ
十一發ノ禮砲ヲ發スルモ若事故アリテ其堡砦砲臺ニ於
テ答砲ス可シト雖モ若事故アリテ其堡砦砲臺ニ於
テ答砲スル能ハサルモ其港在泊ノ軍艦ヨリ答砲ス
可シ

第五十條

海軍禮砲條例

我カ軍艦海上ニ於テ將旗或ハ代將旗ヲ掲ケタル外國ノ軍艦ニ出會スルキ其指揮官我カ軍艦ノ將校ヨリ上等ノ官職ナルニ於テハ相當ノ禮砲ヲ發ス可シ

但シ外國ノ港灣ニ於テ會合スル時ハ其地方ニ於テ發砲ノ禁ナクハ海上同様ノ禮砲ヲ發ス可シ

第五十一條

我カ軍艦ニ對シ外國ノ艦船ヨリ先ツ其國旗或ハ上帆ヲ下スカ又ハ彼我同時ニ之ヲ下スニ非サレハ我カ軍艦ヨリ先ニシテ之ヲ下ス可カラズ

第五十二條

外國ノ皇帝大統領或ハ皇族ニ對シ皇禮砲ヲ發シ又ハ其國ニ對シ二十一發ノ禮砲及ヒ答砲ヲ發スルキハ其

時間彼ノ國旗ヲ大櫓頂ニ掲ク又外國ノ艦船或ハ貴官ニ對シ禮砲及ヒ答砲ヲ發スルキハ其時間彼ノ國旗ヲ前頂ニ掲ク可シ若シ既ニ此大櫓頂或ハ前櫓頂ニ將旗又ハ代將旗ヲ掲ケアルキハ其大櫓頂ニ掲ク可キ旗ハ前櫓頂ニ掲ク又前櫓頂ニ掲ク可キ旗ハ大櫓頂ニ掲クル事アルヘシ

但シ答砲ハ本艦ノ禮砲終ルヤ否ヤ即時ニ發スルヲ以テ常トス

第五十三條

總テ禮砲ハ信號或ハ其他ノ方法ヲ以テ所在ノ海軍指揮官ニ通告スル後ニ非レハ軍艦ヨリ之ヲ發スルコトナ

但シ其指揮官ニ對スル禮砲ハ此例ニ在ラス

第五十四條

禮砲ヲ發ス可キ數職ヲ兼任スル貴官ニ對シテハ其兼任ノ官等中最モ多數ノ禮砲ノミヲ發ス可シ

第五十五條

皇子ノ御降誕或ハ凱旋其他全國ノ慶賀アルモハ海軍省又ハ指揮長官ノ令ニ依テ其禮砲ヲ發スヘシ

第五十六條

日出前日沒後及ヒ日曜日ニハ禮砲ヲ發セサルモノトス
但シ特別ノ事件若クハ長官ノ令有ルモハ此限ニ在ラス

第五十七條

總テ禮砲ヲ爲スヘキ海岸ノ砲臺ニ於テハ國旗ヲ揚ケ置キ禮砲或ハ答砲ヲ發スルニ其旌旗ヲ變換スルコトナカルヘシ

第五十八條

砲臺及ヒ軍艦ヨリ同時ニ禮砲ヲ發スル時ハ砲臺ニ於テハ軍艦ノ禮砲第二發目ヨリ發砲ヲ始ム可シ

第五十九條

我カ艦船ト我カ領内ノ堡砦砲臺トノ間ニ於テハ何等ノ事件有ルモ其禮砲ヲ交換スル事ナキモノトス

第六十條

締約國ノ皇帝皇后或ハ大統領ノ誕生日及ヒ重大ノ祭

海軍禮砲條例

祝日ニ於テ該締約國ノ軍艦我カ港内ニ碇泊スルキハ其港ノ砲臺及軍艦ヨリ正午ニ其祝砲ヲ發ス可シ但シ其國ノ軍艦ハ碇泊セスト雖モ若シ他ノ締約各國ノ軍艦ヨリ之カ祝砲ヲ發スルキハ我カ砲臺及ヒ軍艦ヨリモ齊シク其祝砲ヲ發スヘシ

第六十一條

締約各國ノ軍艦數艘同時ニ入港シ各檣頂ニ我カ國旗ヲ掲ケ二十一發ノ禮砲ヲ發シタルキハ同歐ヲ以テ砲臺ヨリ一國毎トニ答砲ヲ發スヘシ又我カ貴官外國ノ軍艦ヲ訪問スルニ當リ其軍艦ヨリ該官ニ對シ禮砲ヲ發シタルキハ其砲臺ヨリモ同歐ヲ以テ答砲ス可シ但シ訪問スル以前豫メ該官ヨリ其砲臺ニ告知ス可シ

明治九年八月十六日太政官第八十二號ヲ以院省使廳府縣へ達

明治八年六月第百號達檢閱使職務條例別冊ノ通改正候條此旨相達候事

別冊

檢閱使職務條例

第一條 凡ソ陸軍ニ在テ各軍管内屯駐ノ各種兵隊並要塞衛戍兵其他砲工方面等ノ諸部ニ於テ服役勤惰軍紀賞ノ張弛景况健康ノ善惡操練ノ精疎ヲ檢閱シ條例規則等實踐ノ度ヲ察シ以テ將校ヨリ下士兵卒ニ至ルマテ進級ノ順序ヲ審コシ褒賞情願ノ事ヲ查確シ以テ勳功賞牌ノ授與ヲ檢シ凡テ全國陸軍ノ情形ヲシテ壅塞

檢閱使職務條例

凝滞ノ患ヒ無ラシメシカ爲ニ陸軍卿毎年一次檢閱使
ヲ派出シ各軍管内ヲ巡廻シ檢閱ノ事ニ任セシム故ニ
檢閱使ノ責任ハ專ラ閱視檢實ノ詳確ナルヲ主トシ直
チニ陸軍卿ノ目代ナルヘシ

第二條 檢閱使ハ將官ヲ以テ之ニ任ス各軍管内ヲ巡廻
スルノ年々十月一日ヨリ始リ十一月三十日ヲ以テ期
限トシ其事務ヲ畢リ職ヲ解ク者トス

但陸軍省内各局近衛及ヒ東京諸官廳等ニ在テハ時
宜ニ因リ或ハ期ニ先ヲテ或ハ期ニ後ルハ、トアルヘ

第三條 方今六管鎮臺ヲ三大別シ東西中部トス而シテ陸
軍省内各局及ヒ近衛諸學校教導團本病院軍馬局病馬廐

裁判所等ハ或ハ別ニ一部ヲ立テ或ハ分テ三部ニ配ス

東部

第一軍管第二軍管及ヒ其管内ニ在ル要塞衛戍砲兵

第六方面工兵方面

中部

第三軍管第四軍管及ヒ其管内ニ在ル要塞衛戍砲兵

方面工兵方面

西部

第五軍管第六軍管及ヒ其管内ニ在ル要塞衛戍砲兵

第七方面工兵方面

但北海道ハ他日鎮臺ヲ設クルニ及ソテ其制ヲ定

檢閱使職務條例

第四條 各部ニ檢閱使一人及ヒ會計監督或ハ副監督一員並歩砲工兵科ノ佐官或ハ各一員並軍醫監或ハ軍醫正馬醫副補各一員ヲ派遣シ歩騎砲工輜重兵及ヒ會計軍醫馬醫等ノ各部ヲ檢閱セシム

但東部ニハ騎兵科佐官尉官一員ヲ加フ

第五條 更ニ尉官一員ヲシテ簿書ヲ掌ラシメ又會計部書記一員ヲ隸屬セシム時宜ニ因リ會計部士官一員ヲ増シ會計監督ノ事ヲ助ケシムヘシ

第六條 檢閱使巡廻中鎮臺營所等著發ノ儀仗兵ヲ出シ及ヒ其滞在中儀仗衛兵ヲ置ク等總テ陸軍敬禮式ニ從フヘシ

第七條 凡ソ檢閱使巡廻中會合ノキ其座列ハ該臺ノ司

令長官ト檢閱使トノ官等ニヨリ上級ノ者ヲ主坐トス若シ同等ナル時ハ故參ヲ以テ主坐トスト雖モ檢閱事務上ニ限リ總テ檢閱使ノ專任タルヘシ

第八條 會計ニ涉ル檢閱ハ監督ノ掌トル所ナリト雖モ其綱領ヲ查實スルハ檢閱使ノ任ナリ故ニ隨行中ハ其職務上ノ專總ヲ檢閱使ノ指令ヲ受クヘシ

第九條 檢閱使及ヒ隨行ノ官員ハ第一節ノ檢閱ニ正服ヲ着シ其他ノ檢閱ニハ軍服下士ハ軍服ヲ用ユ其檢閱ヲ受ル諸將校以下及ヒ同等官文官モ亦第一節ノ時正服ヲ着スヘシ

但第一節ノ檢閱ニ莅マサル輩ハ第三節ノ時正服ヲ着スヘシ

檢閱使職務條例

第十條 鎮臺或ハ營所等ヲ置ク府縣ノ治所ニ到着スル時ハ其地方ノ知事令並各裁判所長官ト互ニ存問シ駐劄シ兵隊ト市井人民ノ間關涉事情如何ヲ尋問スヘシ存問スル事官等ノ卑キ方官ヲ先ニツク

但長官不在ノ時ハ次官之ニ代ル

第十一條 凡巡廻ノ路程ヲ豫メ定メ置キ臺營等ヲ發出スルノ時某日某臺營ニ到着スヘキノ旨ヲ陸軍卿ニ申報シ又此臺營官廂ノ長官ニ報知シ諸事ヲ整頓シ檢閱ノ便ニ備ラルノ用意ヲ爲サシム

但休暇ノ者ハ檢閱ノ期ニ先ツツテ其所管ニ歸ラシム

第十二條 凡各臺營要塞等ニ於テ其法令軍紀ノ張弛

檢閱使職務條例

將校下士兵卒ノ風儀作業及ヒ人民ト交際ノ和否其他俸給ヨリ過度ナル失費或ハ負債ノ有無等ヲ監視シ若シ不正ノ所業人民ノ厭苦トナルヘキ事件アラハ直ニ其長官ニ通知シテ處分セシム

第十三條 凡シ檢閱使其職務上ニ付別ニ陸軍卿ノ特旨ヲ受クヘキ條件アラハ其發程前ニ之ヲ卿ニ請フヘシ

第十四條 各年檢閱使發程ノ期ニ先ツテ臺營要塞衛戍其他砲工方面等ニ於テ其管轄ノ事務ヲ部分詳記セシメ該部長官之ヲ點檢シ以テ檢閱使ノ到着ヲ俟ツ其概略左ノ如シ

第一 軍紀風紀ニ係ル諸命令布達ノ記錄

第三 將校以下ノ勳陟賞罰ニ係ル諸記錄

第三 人員馬匹ノ増減ニ係ル諸牒簿並表

第四 兵器馬具書籍其他諸物品ノ牒簿並表

第五 貨幣及ヒ糧食薪炭被服陣營具ノ出納ニ係ル諸牒簿並表

第六 藥劑器具物品ノ牒簿

第七 廠庫倉庫及ヒ地界ニ係ル諸記錄並畧圖

第十五條 各部長官先ツ其管下ヲ點檢シ牒簿ニ照シテ

遺漏ナキヲ要スヘシ

第十六條 檢閱使ハ豫メ該部ノ長官ニ謀リ時日及ヒ檢閱場ヲ定ム其檢閱ノ區分概畧左ノ如シ

第一節 兵隊集合ノ檢閱

凡ソ此檢閱ハ軍隊ノ容儀及ヒ人馬ノ現員等ヲ檢實ス

ル者ニシテ其要目左ノ如シ

一各軍人體格姿勢ノ良否

一兵器ノ携帶被服ノ裝法及ヒ其徽章ノ適否

一車馬ノ厠具裝法ノ適否

一馬匹ノ骨格並其手入及ヒ裝蹄ノ良否

一人員馬匹ノ員數及ヒ其點呼

右諸點檢ハ諸隊ヲ整列セシメ一々之ニ就テ詳ニ查實ス

第二節 部署ノ檢閱

凡將校以下下士兵卒ノ賞罰黜陟及ヒ人員ノ轉遷増減

等部署ニ係ル一切ノ點檢ヲナス其ノ要目左ノ如シ

一將校以下ノ拔擢名簿

檢閱使職務條例

一一五

- 一 勤功アリテ褒賞ヲ請フヘキ人名
- 一 但其事由ヲ開申スル書類ヲ添フヘキ人名
- 一 疾病其他ノ事故ヲ以テ退職ヲ要スヘキ人名
- 一 但醫官ノ診斷書或ハ其事由ノ證書ヲ添フヘシ
- 一 前一年間ノ將校勤惰錄
- 一 前一年間ノ處罰錄
- 一 前一年間ノ褒賞錄
- 一 賞罰ノ未缺人名
- 一 但淹滯ニ係ル者ハ其事由ノ書類ヲ添フヘシ
- 一 將校以下下士兵卒ノ名簿該部所用ノ物ヲ檢視ス
- 一 現時人員過不足一覽表
- 一 後一年間ニ滿期等ニテ免役スヘキ下士兵卒ノ人名

錄

- 一 後一年間ニ後備軍ヲ編入スヘキ下士兵卒ノ人名錄
- 一 後一年間ニ鎮臺諸隊ヨリ近衛諸隊ニ撰拔スヘキ人名錄
- 一 後一年間ニ下士ノ士官學校入學志願者ノ人名錄
- 一 後一年間ニ兵卒ノ教導團入學志願者ノ人名錄
- 一 下士兵卒再役志願ノ者人名錄
- 一 但隊長並醫官ノ證書ヲ添フヘシ
- 一 前一年間馬匹ノ増減並現時ノ過不足及ヒ後一年間ニ減スヘキ員數錄
- 一 右ハ檢閱使之ヲ點檢シ其員數ヲ查實シ該部ノ長官ニ
- 一 審問シテ其狀況措置ノ可否ヲ詳カニス

檢閱使職務條例

第三節 技術ノ檢査

凡ソ諸兵ノ將校下士及ヒ之ト同等ナル會計軍醫馬醫
軍樂各部ノ諸官並文官ニ至ルマテ遊能技術ノ優劣ヲ
檢査ス其科目左ノ如シ

一 作文

一 數學

一 其本科須知ノ軌典條例或ハ其學科書將校ノ兵書軍

類ノ講義應問等

一 醫術馬醫術其他專門ノ學術ニ從事スル者其學科或

ハ技術ノ試檢

右ハ各人ノ藝術ヲ比較シ優劣ヲ判テ等差ヲ定メ技術

檢査帖ヲ製シテ之ニ記載スヘシ且其平素品行ノ正不

正勤務ノ勉不勉及ヒ才幹能否等ヲ該長官ニ審問シ自
己ノ所見ヲ抄記シ置クヘシ

第四節 操法ノ檢閱

凡各隊ノ將校下士及ヒ兵卒操練射的體操等ノ熟否並
生兵ノ業前進歩ノ程度及ヒ卒業等ノ檢閱ヲナス其要
目左ノ如シ

一 操練ノ熟否

一 射的術熟否

一 體操術ノ熟否

一 生兵業前進歩ノ程度

但卒業ノ部ハ該隊長ニ卒業證書ヲ付與スヘシ

第五節 材料ノ檢閱

檢閱使職務條例

凡兵器馬具被服陣營具野營具及ヒ輜重用車輛ヨリ室内備フル所ノ器具及ヒ書籍牒簿ニ至ルマデ一切ノ物品ヲ檢閲ス其要目左ノ如シ

- 一 兵器馬具及ヒ其附屬諸品
- 一 被服背囊及ヒ屬具
- 一 室内ニ備フル器具及ヒ寢具
- 一 書籍牒簿及ヒ手帖
- 一 病院病室及ヒ病馬廐附屬ノ器具物品
- 一 野營器具輜重車輛及ヒ病車諸具
- 一 消防器具

右諸品ハ其牒簿或ハ表面ニ照シ員數ノ過不足及ヒ其保存ノ注意定規ノ適否等ヲ檢實ス

第六節 會計事務ノ檢閲

凡ソ會計部金貨出納並被服諸具糧食薪炭ニ係ル牒簿及ヒ現貨等ヲ檢閲ス其要目左ノ如シ

- 一 金貨出納ノ牒簿並証書類
- 一 被服諸具糧食薪炭等出納ノ牒簿並証書類
- 一 病院囚獄ニ係ル諸出納牒簿並証書類
- 一 金貨出納計算表被服諸具現在品ノ表

但主任會計官署名捺印シ隊長モ捺印スヘシ

- 一 現貨並抵當品等

右ノ牒簿表面等交互參看シ計算ノ正否用度ノ適否買辦支給停貯分配ノ方法牒簿記注ノ可否等ヲ檢閲シ出納計算表ニ照シテ現貨ヲ查實ス右畢テ金貨出納ノ原

檢閱使職務條例

簿へ監督捺印し、檢閱使ニ呈し、檢閱使亦之ニ捺印ス被服諸具糧食草秣等ハ所在ニ就テ現品檢閱ノ上其帳簿ニ捺印スヘシ

但各隊並會計ノ諸課ヲ備ヘサル官廨ニ於テ金貨出納ノ牒簿ノミ本條ニ准シ捺印シ其他ハ現品ト照會セル表面へ監督捺印スルノミ

第七節 廠廨倉庫ノ檢閱

凡廠廨病院營舍倉庫廨舍等一切ノ家宇ヲ檢閱ス其所屬ノ地界モ亦之ニ屬ス其要目左ノ如シ
一 病院或ハ病室及病馬廨
一 廠廨兵舍營舍廨舍囚獄庖厨及職工所等
一 金庫並糧食薪炭草秣貯蓄所

一 兵器馬具及ヒ被服庫

一 火藥庫

一 練塲塲訓馬塲射的及ヒ體操塲以上共ニ零圖ヲ備フルヲ要ス

右ハ總テ建築保存ノ善惡其注意ノ適不適ヲ檢査ス

第八節 患者及患馬ノ檢閱

凡患者及患馬ノ景況及ヒ其療法ノ適否等總テ病患ノ入馬療法一切ノ事ニ係ル諸件ヲ檢閱ス其ノ要目左ノ如シ

一 入院病院病室患者ノ景況及其療法ノ適否

一 入院病馬廨病馬ノ景況及其療法ノ適否

一 前一年間患者ノ報告

一前一年間病馬ノ報告

右ノ諸件ハ主任ノ醫官ニ審問査實シ且後來人馬ノ健康ニ係ル注意ノ報告ヲ取ルヲ要ス

第十七條 凡下士拔擢進級ノ法歩兵ハ中隊長砲工及輜

重兵ハ小隊長騎兵ハ大隊長ニ呈ス大隊長之ヲ點檢取

捨シ之ヲ聯隊長ニ呈ス聯隊長ヲ獨立ノ大隊小隊長等ニ在

下同又之ヲ點檢取捨シ更ニ定議拔擢名簿ヲ作り之ヲ

檢閱使ニ呈ス檢閱使其才能ヲ審問シ一隊毎ニ甲乙ヲ

比較シ自己ノ所見ヲハ順次ヲ取捨シ更ニ決定拔擢

名簿三本ヲ製シ一ヲ該隊ニ附シ一ヲ司令長官ノ許ニ

止メ一ヲ陸軍卿ニ呈ス

第十八條 其尉官ノ拔擢ハ聯隊長其管下曹長ノ少尉ニ

少尉ノ中尉ニ中尉ノ大尉ニ昇ルヘキ者ヲ撰ヒ拔擢名

簿ヲ作り之ヲ司令長官ニ呈シ長官其管下各隊ノ拔擢

名簿ヲ合シ自己ノ取捨ヲ加ヘ更ニ定議拔擢名簿ヲ作

リ之ヲ檢閱使ニ呈ス檢閱使其才能甲乙ヲ審問查明シ

自己ノ所見ヲ抄記ス其佐官尉官ト雖モ司令ノ職ニ在

ノ拔擢ハ司令長官親ヲ名簿ヲ製シ直ニ檢閱使ニ呈ス

檢閱使其才能甲乙ヲ審問查明スル等尉官ニ於ケルト

異ナルコトナシ

諸局諸校及諸方面等ノ如キ一部局ヲナスモノハ該部

ノ長タル者佐尉官ノ拔擢名簿ヲ製シ檢閱使ニ呈スル

ハ司令長官ニ異ナルコトナシ且下士ノ拔擢名簿モ亦親

カラ檢閱使ニ呈スルモノトス

檢閱使職務條例

第十九條 凡各部ノ檢閱事務全ク了ルノ後陸軍卿ノ命ニ依リ各部ノ檢閱使近衛都督鎮臺司令長官等ヲ陸軍省内ニ會合シ諸將校及ヒ是ト同等ナル會計軍醫馬醫部諸官ノ拔擢進級停年進級ノ兩名簿ヲ撰定シ陸軍卿豫テ之ヲ上奏ス

第廿條 凡軍人ニ勳功賞牌ヲ授與スルコト或ハ停年滿期或ハ非常勳功戰時或ハ從軍勞役等別ニ定則アリ其檢査ノ法ハ概チ上條ニ准ス然レトモ等級昇進ト賞牌授與ヲ同時ニセサルヲ正例トス

但進級ト賞牌ト其期ノ同時ニ當ルヘキ者ハ先ツ級ヲ進メ後ヲ賞牌ヲ附ス然レトモ戰時ハ此定例ヲ廢スルモノアリ

第廿一條 檢閱使ハ諸軍人ノ賞牌及從軍牌ヲ帶ルモノヲ集合シ一々其免許狀ヲ檢査ス若シ恣マ、ニ之ヲ帶ルモノアルハ司令長官ニ照會シテ陸軍卿ニ上達シ相當ノ罰典ニ處ス

第廿二條 檢閱使各部ノ檢閱ヲ終ル毎ニ該管内檢閱中目録ノ件々ニ付存旨アラハ別ニ一書ニ記シテ其長官ニ申告シ置クヘシ

第廿三條 該部其檢閱ノ事務全ク終ルノ後ヲ所在ノ諸兵ヲ集合シ觀兵ノ式ヲ行フテ檢閱使ノ便宜ニヨルヘシ

第廿四條 凡臺營要塞衛戍等ノ將校ヨリ下士兵卒ニ至ルマテ情願訴訟ノコト總テ其隊中ノ順次ヲ逐フテ之ヲ檢閱使職務條例

該部ノ長官ニ上達シ長官之ヲ點檢シテ其事實ヲ詳明
シ或ハ裁斷シ或ハ陸軍卿ニ上達スルヲ法トス然レ
ル事故ノ檢閲上ニ關スルモノハ集メテ檢閱使ノ來着
キ俟テ商議點檢ニ備フルヲ以テ正例トス

第廿五條 諸軍人其情願ノ筋假令要路ニ故障嫌疑アル
ノイタリモ自カラ檢閱使ニ直訟スルハ最嚴禁ナリ檢
閱使亦巡廻中諸筋ノ簡履等該部長官ヨリ傳達スル
モノニ非レハ一切之ヲ受領スヘカラス

第廿六條 諸軍人其情願訴訟其隊長ヨリ傳達セスシテ
或ハ檢閱使ニ直訟シ或ハ陸軍卿ニ上控スルモノハ其
願書ヲ點テ該部長官ニ通報シ相當ノ罰典ニ處シテ其
營中ニ事狀ヲ掲書セシム各部ノ長官ハ檢閱使到着ノ

前條ヲ管下ノ軍人軍屬ニ禁斷ノ條件ヲ布告熟知セシ
ムヘシ

但不在中ノ軍人軍屬モ亦本條ニ揭示スル諸件ニ觸
ルノイアラハ本人歸參ノ上其處分ニ及フヘシ

檢閱使職務條例

第一條 檢閱使ハ陸軍卿ノ命ニ依リ檢閲使ニ任ズル
第二條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第三條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第四條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第五條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第六條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第七條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第八條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第九條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十一條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十二條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十三條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十四條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十五條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十六條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十七條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十八條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第十九條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍
第二十條 檢閱使ハ檢閲使ノ職務ニ關シテ其職務ノ範圍

明治九年五月十五日太政官第五十三號ヲ以院省使廳府縣へ達

明治七年七月第九十三號同八年五月第八十八號達ヲ廢シ更

ニ官舎貸渡規則別紙ノ通相設候條徃來ノ官舎或ハ官廳

附屬ノ家屋等貸渡候向ハ本年一月一日ヨリ宿代取立大

藏省へ可相納元金建坪等取調ノ儀院省使ハ大藏省廳

府縣ハ内務省へ可申出此旨相達候事

但借地料ノ儀ハ明治八年七月百十四號布告官有地第

二種但書ノ通可相心得事

別紙

官舎貸渡規則

第一條

官舎貸渡之時ハ毎月宿代取立シテ

但倉庫定番半番見張番及其他本人ノ情願ニ由ラス公務ノ都合ヲ以貸渡ス者ハ此限ニアラス

第二條

宿代ハ元金ノ八分ヨリ一割迄ヲ制限トシ適宜斟酌シテ取立ツヘシ右取立高ノ内七分ハ上納三分ハ其應ニ備置修繕費ニ充ツヘシ

第三條

官舎新營ノ分ハ其建築費ノ總額古家作ノ分ハ買上直段或ハ當時賣買スヘキ直段ヲ以元金ト定ムヘシ但貸渡ノ節修繕ノ分ハ其費額ヲ元金ニ加ヘ爾後修繕ノ費額ハ加ヘサルヘシ

第四條

官舎貸渡規則

宿代ハ年ヲ以計算スヘシト雖モ取立方ハ月割タルヘシ
但十六日以後ニ貸渡タル時又ハ十五日前ニ返却シタ
ル時ハ半月分取立ヘシ

第五條

宿代上納方ハ三個月毎ニ取調修繕費遣拂ノ分ハ毎年六
月迄ニ精算帳差出シ残アラハ後日ノ費用ニ充置ヘシ

第六條

官舎外廻リ雨漏又ハ臨睡大破ノ外一切ノ修繕ハ自費ヲ
ルヘシ

第七條

拜借人自費建増等願出ル時ハ實地検査ノ上差支無之分
ハ允許スヘシ

第八條

拜借人交換ノ節ハ篤ト検査ヲ遂ケ若シ毀損スル所アル
カ又ハ附屬品等不足スル時ハ辨償セシムヘシ
但自費建増等ノ存廢ハ新舊拜借人ノ示談ニ任スヘシ

(改正)

乙明治十年五月廿二日内務省
第五十三號ヲ以府縣ニ達

明治九年第五十三號官舎貸渡規則中第一條但書並第三
條改正本年第三十七號公達ノ趣モ有之候ニ付右ニ照準
元金其他トモ取調當省ニ可申出且壬申八月大藏省百二
十號達宿代取立高仕譯書ノ儀ハ本年四月ヨリ別紙離形
ノ通改正候條此旨相達候事

但官舎修繕料遣拂清算帳ノ儀ハ従前ノ通可相心得事

(雜形)

官宅宿代上納仕譯書

(朱書) 棟一名拜借ノ書法

何番官宅建坪何程 二階建州

元金何程 平家カ

此宿代金何程 (朱書) 上納高修繕料ノ歩合ヲ不分

但元金ノ一割金何程 (四拾五入ノ算) 十二个月

割一个月金何程 (四拾五入ノ算) 何年何月ヨリ

同何月迄合何个月分

(朱書) 同何月迄合何个月分

(朱書)

(長家) 建一棟數名拜借ノ書法

何番官宅建坪何程 二階建カ何戸建

元金何程 平家カ

此宿代金何程 (朱書) 但元金ノ一割 (四拾五入ノ算) 十二个月割一个

月金何程 (四拾五入ノ算) 何年何月ヨリ

同何月迄合何个月分

合金何程 同何月迄合何个月分

内 七分通

宿代上納ノ分

金何程

官舍貸渡規則

三分通

金何程

修繕料備置ノ分

右者何年何月ヨリ同何月迄官宅宿代取立高仕譯書如斯

候也

年月日

何府知事姓名印

(参考) 明治九年五月十二日大政官第

五十二號ヲ以院省使廳ニ達
官用地内ニ有之官舎貸渡候節借地料ノ儀ハ其地
方廳ニ於テ取調候管ニ付貸渡候都度該廳ニ通知
可致且收入候借地料ノ儀ハ期限ノ通其地方廳ニ
送付可致此旨相達候事
但從前貸渡有之分ニ本文ノ通可取計事

(参考) 明治九年五月十九日內務省

乙第六十五號ヲ以府縣ニ達
院省使廳官用地ノ内ニ有之官舎ヲ貸渡候節借地
料取立方ノ儀ハ其地方廳於テ取調候管ニ付貸渡
ノ都度該廳ヨリ通知有之候ハ、相當ノ借地料取
調管省ニ可申出取入ノ儀モ季節ニ至リ該廳ヨリ
請取上納方ノ儀ハ昨年當省乙第二十一號達ノ通
可取計此旨相達候事

但從前貸渡有之分ニ收入手續ノ儀ハ本文ノ通
可相心得事

(参考) 明治十一年三月四日內務省

乙第十九號ヲ以府縣ニ達
明治十一年七月ヨリ同十三年六月迄諸官舎營繕
費豫算總申牒之儀ハ容歲當省乙第四十二號達之

通相心得 但警察署ニ屬スル廉ハ乙號中ニ來ル四
 月三十日限可差出此旨相達候事
 但十年度府縣營繕費之儀ハ同年各廳豫算總額
 ノ凡三分一ニ決定相成候條來年度ノ儀ニ其割
 合ヲ以格別節減之見積可相立事

(參考)

明治十一年三月二十六日內務省乙第
 三十一號ヲ以東京府ヲ除ク府縣个達

各地方警察署明細書別紙書式ニ照準シ取調往復
 ナ除ク外日數二十日限リ當省ニ可差出事
 但ニ爾後警察署并分署新築或ハ廢合候節本
 細文ニ準キ其都度可届出事
 何府警察署明細書

何地名警察署

位置 何大區何小區何郡何町

取地 官有地第何種何々坪

廳舎 建坪何々坪

但何年度新築又ハ舊何々ノ建物ニ
 修繕ヲ加ヘ或ハ民屋假用等其事由

ヲ零記ス

縣廳距離 何里何町

官吏定員 警部何人
 巡查何人

所轄分署 何箇所

管轄地名

第何大區何小區何郡何町

廳舍以下營繕之儀調查之都合ニ有之候條自今新
營修繕ニ不拘本年乙第四十二號達ニ基キ諸官舍
及獄舍警察署并官國幣社御陵墓等營繕費豫算簿
甲乙丙之三類ニ準リ目論見精算帳共々別廉ニ
申候様可致此旨相達候事
但乙類中目論見帳精算帳ノ儀、獄舍、警察署
別冊ニ取調可指出事

御旨奉出日

正誤

- 第九一丁 (檢出書) (銀行) (發行)ノ誤
- 第九一三丁 (檢出書) (同上)
- 第九一五丁 (檢出書) (同上)
- 第一一〇三丁 (檢出書) (陸軍) (海軍)ノ誤

明治十一年八月十日版權免許

編輯人

高知縣士族

田中 信 顯

第一大區十三小區
濱町一丁目一番地

出版人

和歌山縣平民

北島 茂 兵 衛

同大區六小區通
壹町目十五番地

發行人

東京府平民

須原 鐵 二

同大區同小區西
河岸町十三番地

東京
同同同同同同同同同同同同同同同

賣捌所

稻田佐兵衛
小林新兵衛
中野吉兵衛
牧野吉兵衛
山中野兵衛
出雲市兵衛
太田右衛門
北澤伊八
吉川半七
長野龜七
青山清吉
河合富吉
坂上七
東洋社

西京坂
大坂
同同同同同同同同同同同
尾州名古屋
豐後府內
肥後熊本

村上勤兵衛
柳原喜兵衛
田中太左衛門
大野木市兵衛
松村九兵衛
前川善兵衛
淺井吉兵衛
岡田茂兵衛
岡島眞七
中川勘助
吉野平助
片野東四郎
山川正三郎
水島貫之